三宅米吉校閲
手島春治著

日本文法教科書

東京　金港堂

815. Te212n (2)

日本文法教科書

例言

一、言語文章は世と與ゝ變遷すと雖其の体に至りては自ら一定として動かすべからざるものなり。さるを我が國今日の文体を察するに筆を把る人人おのがむき〳〵に書き下して殊態異様さながら其の面を見るが如し、是れ和文より來るあり漢文より來るあり又は洋文より來るあり て此の錯雜を致しならん。然りと雖既ゝ取て我國の文体となせる以上は其の孰れより來るを論せず必や我國の語格文法に從はざるべからず。さるを其の殊態異様なる彼が如く其れ甚しきは何ぞや。此れ文法書の之を矯正

815. Te212n (2)

27.3.-4
図書館

261177

するものなきに外ならざるべし。抑此の類の書にして紙に梓に上れるものなきあらずといへども多くは古風に泥みて其の説く所腐儒に失し、若しくは只管に洋風に擬して大に本邦固有の正格を誤るの憂あり。是れ淺學を顧みず此の書を編成せし所以なり。

一、言葉の數いと多しといへども之を其の種類によりて分つ時は僅に名言、代名言、用言、副言、後置言、接續言、感歎言の七種に歸するものなれば、これが類別をなす決して難きにあらざるべし。さるを古來類別の法整はず且つ字書に就きて求むべき事と音韻の學に就きて講究すべき事とを一把一束として説かんとするが故に初學の人人動もすれば茫洋中に漂流して歸着する所を知らざるの想ひあり。故に此の書は本邦固有の語格を本とし旁英國の文法を參酌して勉めて類別の法を簡明ならしめしが尚穩ならざるふしもなきにあらざるべし。

一、此の書は讀者の耳遠からん事を慮り源て今日普通の文体を用ひたれども術語の如きはなるべく先輩の慣用せし所に從へり。但し從來の文法書とは類別の法聊か異なる所あるを以て先輩の未使用せざる所にして著者の造り出せしものなきにしもあらず。されば其の名稱の尚穩かならざるものもあるべければ是れ亦他日考究の上訂正する事あるべし。

一、此書の目中には新に設けしもあり又從來の説き方とは少しく其の趣を異にするもありて初學の人人奇異の想

ひを抱くこともあらん、故に斯る條下ゐは備考として其の註解を加へ又は著者の意見を記し置きぬ。

一、第二篇と第三篇とには各項の下に練習を附し初學の爲めに講究の便を與へ置きぬ。されど册子の浩瀚ならんことを恐れて纔に五六例に止めたり、玩索して之を應用するは其の人にあるべし。

一、練習の部に於て言葉の種類變化等を示すに諸種の符號を用ひたるは省略簡便を旨とせるなり。されど此は目新しき法なれゐ學者の記憶に苦しむ事もあらん。然る時は支那字もて純名、普代、令受態抔と記すも差支いなき事なれども術語の數はいと少ければ之を記憶する決して難きわざにはあらず、況して一たび之を記憶せば習練上其の便實に言ふべからざるは著者の實驗せし所なり、學者請ふ之を試みよ。

明治廿三年八月

著者識

日本文法教科書

目次

第一篇。音論……二丁

第一章。假名……二丁

第二章。五十連音及び子母音の區別……四丁

第三章。子音の類別……十四丁

第四章。拗音……二十四丁

第五章。發呼法の區別……二十八丁

第六章。切音……三十三丁

第七章。伸音……三十五丁

第八章。通音及び音便……三十七丁

第二篇。言論……三十九丁

第一章。名言……三十九丁
第一項。名言に三種ある事……三十九丁
第二章。代名言……四十丁
第一項。代名言に二種ある事……四十一丁
第三章。用言……四十二丁
第一項。用言ゐ三種ある事……四十三丁
第二項。用言ゐ六種の語格ある事……四十四丁
第三項。作用言ゐ八種ある事……四十八丁
第四項。形狀言に三種ある事……五十九丁
第五項。用言に時の變化ある事並に其
助用言の事……六十六丁
第六項。作用言第一種第六種並に第八
種の言葉へ助用言を添へざレて完成の時となる事……七十一丁
第七項。作用言に自動他動の二種ある
事……七十三丁
第八項。用言に五種の語勢ある事並に
其助用言の事……八十丁
第九項。否不の助用言の事……八十六丁
第十項。治定の助用言の事……八十八丁
第四章。副言……九十二丁
第五章。後置言……九十四丁
第六章。接續言……九十九丁
第七章。感歎言……百二丁

第三篇。文論……百五丁
第一章。起結三轉法……百五丁
第二章。文章の分解……百十一丁
第三章。言葉の關係……百二十八丁
第四章。文章の正誤……百四十二丁
附錄　術語及び符號

日本文法教科書

三宅米吉
手嶋春治　著

國語とは一國又は一群の人互に思を通はし用便を達せんが爲めに用ふる言葉の總稱にして、言葉とは口より出ゐ音聲を種種に組立て一定の意義を附したるものなり。蓋相對せる人には言葉もて直に其の耳に訴ふるを得べきも、隔りたる人又は後の世の人人に傳へんには言葉の能くする所にあらず、必や其の目標たるものを造り出で書して以て其の目に訴へざるべからぎ。此の目標を文字といひ、文字にて思想を書き綴りたるものを文といふ。是を以て國語

の法を明かにし文作る人人の心得を示さんとは先文字と音韻の種類とを說き、次ぎに言葉の種類と變化とを論じ、次ぎに文の組織と言葉の關係とを明かにし、終には前項の例格により故らに不正の文を掲げて其の誤を訂さしめ以て作文の力をたしかめずはあるべからず、故に此の書は音論、言論、文論の三篇に分かち、文論中更に正誤の一章を加へたり。

第一篇。音論。

第一章。假名。

我が國にて現に用ふる所の言葉の目標たる文字に漢字と假名の二種あり。漢字は主として言意を標示し假名は專ら音聲の目標たり。故に今音聲の種類、性質等を論ずるに

方り先假名文字の事を述べざるべからず。假名の數は四十七にして其の体に平假名扁假名の二種あり、次ぎの如し。

平假名。

いろはにほへとちりぬるをわかよたれそつねならむうゐのおくやまけふこえてあさきゆめみしゑひもせす

扁假名。

イロハニホヘトチリヌルヲワカヨタレソツネナラムウヰノオクヤマケフコエテアサキユメミシヱヒモセス

假名の外にンの一字あり、此の字は撥呼の符號として用ふるものなれば、發呼法の條中に說くが如く音聲の都合によりてム又はヌに響き或は英國抔にていふngの響となるものなり。蓋今日ン文字を用ふる所は古へは重まム文字を、

用ひたれども言葉によりてはいまを用ひたるもあり。既にン文字を撥呼の符號とする上は強ひてム文字を用ふるに及ばざるなり。

第二章。五十連音圖及び子母音の區別。

五十連音圖とは音韻の種類によりて假名を縱横に並べ、其の性質を知るに便ならしむるものにして、縱なるを何行と呼び、横なるを何の段と稱ふ、例へば阿行、加行、佐行、阿の段、伊の段、宇の段等の如し。

音韻を其の種類によりて排列すれば、阿行の五音は其の聲單純にしてあーアえーェの如く長く延べて唱ふるも本音の外に出でず、而して此の音は他の諸音を生ずる基礎なるが故に韻又は母音と稱す。然れども加行以下の音は別に父音と稱ふる隱微なる音聲ありて、これと阿行五音中の一と相合して生ずるものあり、故にかーアきーイの如く其の聲を長く延ばして唱ふるときは竟に阿行の韻に歸す、此の種の音を子音と稱す。

五十連音圖。

子音					母音	
多行		佐行		加行	阿行	段名 ＼ 行名
チ CH	テ T	シ SH	ス S	ク K		母音 ＼ 父音
	た		さ	か	あ	阿の段ア A
ち		し		き	い	伊の段イ I
			す	く	う	宇の段ウ U
	て		せ	け	え	江の段ェ E
	と		そ	こ	お	於の段オ O
	舌頭音	頭舌齒音	齒舌齒音	喉音		音性
頭舌音						

子音								
多行	奈行	波行		麻行	也行	良行	和行
ツ TS	ヌ N	ハ H	フ F	ム M	イ Y	ル R	ウ W
	な	は		ま	や	ら	わ
	に	ひ		み	い	り	ゐ
つ	ぬ		ふ	む	ゆ	る	う
	ね	へ		め	え	れ	ゑ
	の	ほ		も	よ	ろ	を
齒舌音	舌頭音	喉音	唇音	唇音	顎舌音	舌頭音	唇音

備考第一。前表に據て之を觀れば母音の數ハ五箇にして子音の數は四十二箇なるが如し。（前表中イヵエの單山せる所以は下に既く述べし。）然れども猶此の外にガギグゲゴ、ザジズゼゾ、ダヂヅデド、バビブベボ、パピプペポ等の諸音あるを以て子音の數

は總じて六十七箇なり。但し此の種の音は之をしるべき音標字なきを以て音種のやや類似せる音標字を假用し之に〃點或は○點を加へて其の音を彰表せり。今五十連音圖の例に倣ひて其の圖を製すれば左の如し。

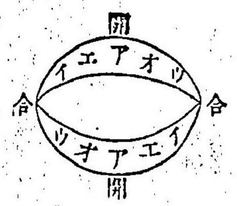
子音						
多行		佐行		加行	段名 / 行名 父音 / 母音	
ヂ J	デ D	ジ ZH	ズ Z	グ G		
	ざ		さ	が	A ア段の阿	
ぢ		じ		ぎ	I イ段の伊	
			す	ぐ	U ウ段の宇	
	で		せ	げ	E エ段の江	
	ど		ぞ	ご	O オ段の於	
	舌頭音	顎舌陽音	齒舌陽音	喉音	音性	
顎舌音						

子音			
波行		多行	
プP	ブB	ヅDZ	
ぱ	ば		
ぴ	び		
ぷ	ぶ	づ	
ぺ	べ		
ぽ	ぼ		
唇音	唇音	齒舌音	

備考第二。前二表中毎行の上方並に毎段の右側に扁假名もて記せるものは父音と母音とを示せるものにして、此の兩音を結合すれば即子音を生ずるなり、譬へばクとアとを結合それぱカを生じ、クとイとを結合すればキを生じ、クとウとを結合すればクを生じ、クとエとを結合すればケを生じ、クとオとを結合すればコを生じ、以てカキクケコの五音成るが如し。佐行以下類推して知るべし。扁假名の側に更に羅馬字を加へたるは兩音結合の狀を解するに容易ならしめんと欲してなり。英語のFハ齒唇音なれども之

には歐洲大陸諸國に於けるが如き單純なる唇音として之をフに當てたるなり。

備考第三。也行和行の子音は他の子音と稍其の性質を異にす、故に或は此の諸音を呼ぶに重母音の稱を以てするものあり。蓋母音を發するには口竅の伸縮各其の度を異にす、乃イは口竅を尤も平遍にして發する音、アは口竅を尤も開放して發するもの、ウは尤も之を縮めて發するものなり。今其の口竅伸縮の順序を云へばイエアオウとなる、之を圖にて示せば左の如し。



故に其の兩端なるイとウとは口竅の形狀より稍父音の性質を取り他の母音と結合して一種の音を生ト得べし、乃イと他の母音と結合すればヤ、ユ、ヨを生ト、ウと他の母音と結合すればワ、ヰ、ヱ、ヲを生ず。然れば則これらの諸音は二個の母音の結合したるものにて之を重母音と稱するも決して理なきにいあらざるなり。然りといへどもこのゐる場合のイ、ウは他の母音と結合する性質より之を父音と名づくるも亦可なり、隨て之によりて生ずる諸音をも子音と稱すべし。審に之を言へばかゐる場合のイ、ウは半は父音の性質を取れども猶母音の本性をも保有するものといふべし、彼の英人がYWの二音を半母音と稱するは蓋此の故にして著者が前表中Yを以て也行の父音を示しWを以て和行の父音を示したるも其乃意亦茲に在るなり。抑此の條の所說は拗音の條下と親密なる關係を有するものなれば學者宜しく留意すべし。

備考第四。 也行のイゝイとイの結合したるもの即同ドものの結合したるなれバやはり阿行のイに均しく、和行のウも同じくウとウの結合したるものにてこれも阿行のウに均し、故ゐ也行和行にはこれらの音を缺きたり。又也行のエはイ、エにて阿行のエとゝ輕重聊異なれども此の音も今は別にあらされバ其れ音標字を設けず。故にこれら也行和行の諸音の缺けたるは皆阿行の諸音をもて塡めたり、

母音は元來咽喉より發する單一の音なれども口竅の伸縮

開合によりて或ハアとなり或ハイとなるなり。而して其の開合は寧口竅の全部に在り。父音は之と異なりて專ら口内諸部の結搆と其の一局部の開閉とによりて生ずるものなり、而して父音は單獨にては其の發音明瞭なるもの少なく、大抵母音と結合して之を種種に變じ以て子音を生ぜるなり。但し開閉の事は次章に説明すべけれど今は口内諸部の結搆を略説し以て喉音、舌頭音、顎舌音、齒舌音、齒舌喝音、顎舌喝音、及び唇音の因て相異なる所を知らしめんとす。

喉音とは喉頭を開き或は狹めて發する音をいひ、舌頭音とは舌頭を上方の齒齦に壓迫し聲息を口内に充塞して發する音をいひ、顎舌音とは舌の上面と上顎との間を閉ぢ或は狹めて發する音をいひ、齒舌音とも舌頭を齒齦に觸れ氣息

を齒端より脱れしめて發する音をいひ、齒舌喝音とは齒齦と舌の前端との間を狹め氣息を齒端より脱れしめて發する音をいひ、顎舌喝音とは上顎と舌の上面との間を狹め其の間より息氣を驅逐し且之を齒端に觸れしめて發する音をいひ、唇音とは唇を閉ぢ或は狹めて發する音をいふ、精しくは子音類別表に照らして考究すべし。（英語のF Vの如きは上齒と下唇との間より氣息を發するものを齒唇音といふ。）

備考第五。 五十連音圖ヨ多行のナ、ツ並びにヂ、ヅ、佐行のシ並びにジ及び波行のフ等を別行として記せるは其れ音性の本行に異なるを以てなり。然れども音の由來を尋ぬれバいづれももと皆一種の音なりしもの漸く變轉して其の性質を異にするに至りしこと明かなり。故に

用言の活用等に至りては皆同一行と見て操作すべきなり。

第三章。子音の類別。

前章に於て五十連音を大別して子、母二音となし、又子音を類別して喉、舌、唇等の七種に區別せしが、此の章に於ては更に又此の七種の諸子音を開、閉の二種類に分かち而して閉の諸音に息、聲、轉舌の三種と開の諸音に息、聲、鼻の三種あることを說くべし。

閉音とは喉、舌、唇等の如き口内の或部分を閉ぢて發するものをいひ、開音とはこれを狹めて發するものをいふ、但し開閉の部分は音性の由て變ずる局部と同一なるを以てまづ其の音の性質を詳ならしめ開閉の局部は隨て知らるるなり。

息音とは强く息氣を加へて發するものをいふ、故に此の種の音ハ息氣のみにても發し又吸氣のみにても不充分ながらに發するを得るものなり、世に淸音と稱するもの即是れなり。

聲音とは音聲を主として發するものをいふ、故に此の種の音ハ息氣のみにては勿論少しく息氣を强むるも尙其の發音を妨ぐるものなり、世に濁音と稱するもの即是れなり。

轉舌音とは舌頭を振轉して發するものをいひ、鼻音とは音聲を鼻竅より流出せしむるものをいふ。左表につきてこれらの區別を明かにすべし。

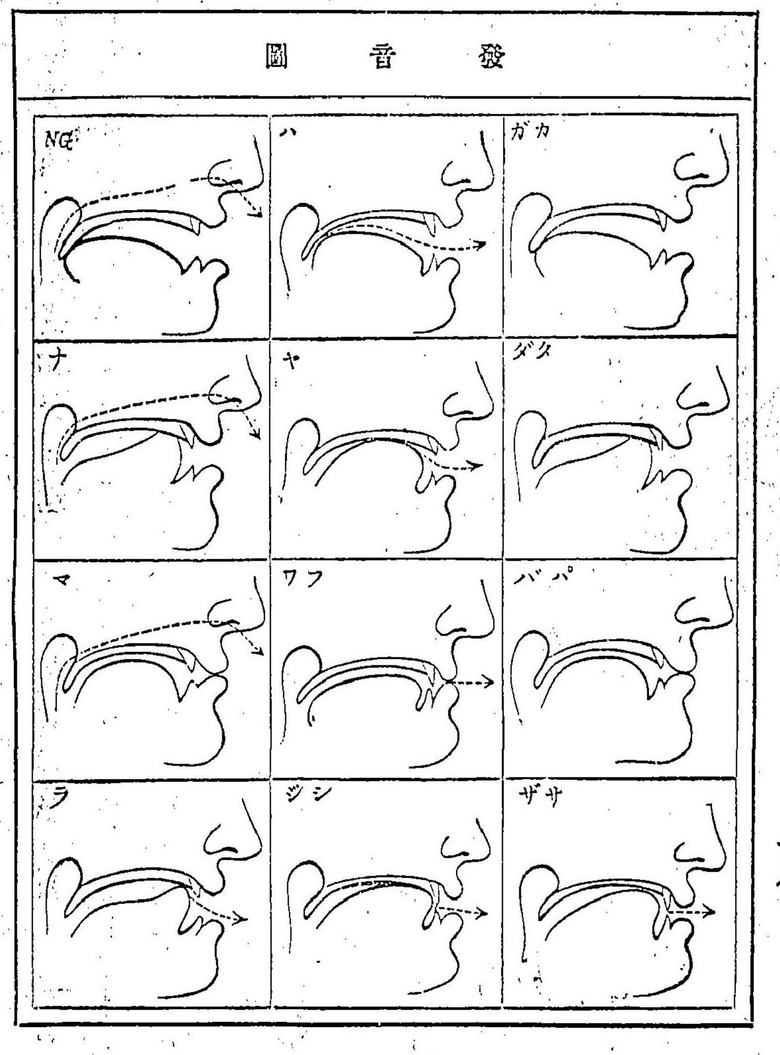
子音類別表

音種＼音性	閉			開		
	息（清）	聲（濁）	鼻	息（清）	聲（濁）	轉舌
喉音	か K	が G	Ng	は H		
舌頭音	た T	だ D	な N			ら R
顎舌音	ち Ch	ぢ J			や Y	
齒舌音	つ Ts	づ Dz				
齒舌喧音				さ S	ざ Z	
顎舌喧音				し Sh	じ Zh	
唇音	ぱ P	ば B	ま M	ふ F	わ W	

備考第一。此の表は五十連音圖各行の首字を以て他の四音を代表せしむるものなれども行中に屬する他音若し其の性質を本行と異にするものあるときは表中殊に之を掲出せり。例へば波行のフは其の性質を本行と異にするを以て表中に特出し而してヒヘホの三音はハ中に含有せらるるが如し。

備考第二。前表中開閉、息、聲等の區別に音種の名を命ず喉、舌、唇等の區別に音性の稱を付したるは只分類の便を圖りてなり。これらの分類たる均しく皆音の本質に基づきたるものなれば音種ハ又音性と云ふも可なり、音性は亦音種と云ふも可なり、故に強ひて其の名稱に拘りて本意を誤ること勿れ。

發音圖



備考第三。諸子音を發するに當り口内諸部の取る所の位地は細しく之を記し難けれどもこゝに其の略圖を掲げて之を示せり。宜しくこれらの圖につきて其の大要を知るべし。

此の圖はベル氏の發音圖に據れるものなり。矢線は氣息の出づる方向を示せるなり。ナ、ツは此の圖に掲げざれども、ツはタとサの結合したるもの、ナはタとシの結合したるものと心得べし。

備考第四。凡息氣を主として發するものは其の聲鋭にして澄めるが如く、音聲を主として發するものは其聲鈍にして濁るが如し。故に息音を清音と云ひ聲音を濁音と云ふも可なれども故らに清、濁の舊名を廢して代ふるに息、

聲の新稱を以てするの要あらざるが如し。然るに今好で此の新稱を用ふる所以のものは初學の人人がカの濁音はガにしてサの濁音はザなり、タの濁音はダにしてナの濁音はヂなるによりて又ハの濁音はバなり、フの濁音はブなりなど速了するものあらんことを恐るるに由りてなり。前にもいへる如く本邦にては現今濁音を記するに適當の文字なきを以て音種の相類似せる文字を假用し之に符號を施し以て其の音を表彰せ、これによりて音質の大差あるにも拘らず某の濁音は其の文字の表彰する原音の濁れるなりと誤解するもの甚多し。彼の世人がハの濁音はバなりてパピプペポは其の中間に介立せる半濁音なりと說けるが如きは殊に其の文字に拘泥せるより生ぜる謬見なり。蓋世に半濁音抔いふ音のあるべくもあらず。抑此の音は純粹なる清音にして之に對するる濁音はバビブベボなり、即パパは共に唇音閉にして息氣を以てすれバパとなり聲音を以てすれババとなり其の間實に清濁の差異あるのみ。然るに此の文字の本音たるハに至ては喉音開にして全くパバと關係なし。さて又ハヒヘホは喉音開にして清音なるが之に對する濁音なきは如何にと云ふに、強ひて之を求むれバアイエオなる母音こそ其の息氣を弛めたるものゝてこれが濁音に相當すと言はざるを得ざれども、元來母音と子音とは其の本性に於て著しき差違あるを以て直にアイエオの母音を以てハヒヘホの濁音とはなしがたし、故にハヒ

ヘホに對する濁音は缺けたりとすること妥ならめ。又世人が濁音符に拘泥すること彼れが如く甚しきを以て也行と和行との如き宜しく取て濁音中に收むべき諸音をも（此二行の濁音なる所以につきては次ぎに云ふべし。）唯其の符號のおきが爲めに直ちに清音と心得るもの少からず。又奈行、良行、麻行の如きは清音にもあらず濁音にもあらざる一種特別の音なるにも拘らず、徒に符號の有無に由りて甘ドて清音中に攝取す。世人の慣習既に此の如くなれば更に新稱を創設して音質を明かにするにあらずんぞ大に初學の人を誤ることもあるべし、是れ此の書に於て清、濁の舊名に易ふるに息、聲の新稱を以てし、且別に鼻音、轉舌の二種を加へて子音を類別せし所以なり。

備考第五。 唇音閉の息音たるバビブベボは純粹の息音にして之に對する聲音はパピプペポなること及び喉音開の息音たるハヒヘホに對する聲音の缺けたることは前既に之を言へり、故に今同行中の一音たるフに對する聲音を說かんとす。抑此の音は波行の一音なれども子音類別表に示しし如く唇音開の息音なれば、其の音性本行に同じからず、隨て之に對する聲音は唇音閉の聲音たるブにはあらずして唇音開の聲音たる和行のウなることは得て知るべし。又前章に說けるが如く也行と和行とは稍重母音の性質を有するものなれば主として音聲に由て發する音なり、既に音聲を主とする音なれば其の聲音即濁音たるべきものなるは明かなり。此れこの二

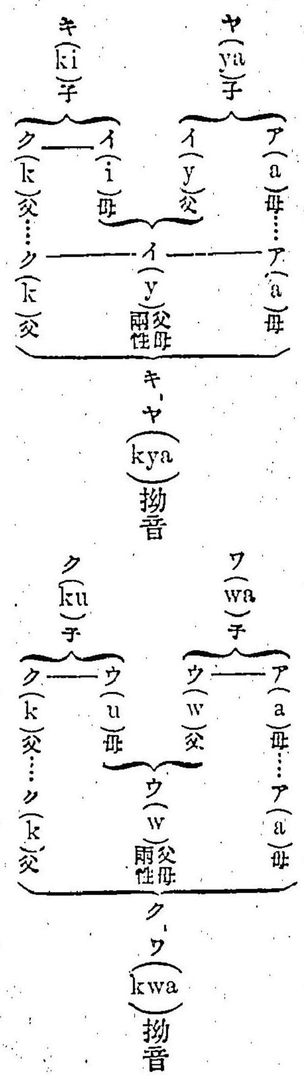
行を類別表聲音の欄に收めたる所以なり。故に今此の二行に對する息音の有無を論ぜんに、和行に對する息音即清音ハ現今奥羽地方にて用ふる唇音開の息音たるハヒフ、ヘホ(猶フ-ハ、フ-ヒ、フ、フ-ヘ、フ-ホと云ふがごとし)なるべけれども、此の音は現今本邦を通じて行ハるるものにあらず。さて又也行に對する息音はヤユヨの音に息氣を加へたるヒ-ヤ、ヒ-ユ、ヒ-ヨの音なるべけれども、これらの音は次章に云ふ所の拗音に類するものなれバ、也行に對する純粹の息音も亦缺けたりとする方妥なるべし。

第四章。拗音。

五十連音圖に列ねたる諸音は總て直音と稱へ音聲を拗曲せずして其の儘に出だすものなれども、此の外に音聲を拗曲して出だす一種の音あり、之を拗音と云ふ。拗音とは也行又は和行の諸音の更に他の父音と結合したるものをいふ、例へバキ-ヤ、キ-ヨ、ヒ-ヨ、ク-ワ、シ-ヤ、シ-ヨ、チ-ヤ、チ-ヨ等の如し。

抑此の二行に限り更に父音と結合して拗音を生じ得る所以の理を考ふるに、元來此の二行の父音は母音のイ、ウに外ならず、而してイの音は母音中最も口竅を平遍にして發し、ウの音は最も口竅を閉合して發するものなるが故ゑ半を父音の性質を取りて他の母音と結合し以て也、和二行の諸音を生ずるを得るは前章に於て既に之を說きさるがおとし。而して其の半バ父音となりたるもの猶其の半バ母音たるの性質あるを以て更に他の父音と結合す、これ拗音の生ずる所以なり。即イは父母兩音の性質を兼ぬるが故に

其の父音なるを以て母音アと結合してイ-ア即ヤとなり更に又其の母音なるを以て父音クと結合してク-イ-ア即キ-ヤとなり、又ウも同ドくウ-ア即ワとなり、ク-ウ-ア即ク-ワとなるが如し。而して我が國には父音を表すべき文字なきが故に拗音を書き表すには通常也行諸音の文字に伊段諸音の文字を冠し、和行諸音の文字に宇段諸音の文字を冠し而して其の間右側に短柱を施し以て一言に呼ぶべき符號とす。抑音の拗直とは子音を生ずる一父一母を以てするを直といひ、一父一母の外尚其の中間に父母兩性を具ふるものの介立するあるを拗といふなり。然れども之を發するに方りてはいづれも一言にして更に長短の差あることなし。尚圖を以て拗音の成立の大要を示せば左の如し。



備考第一。多行のナ、佐行のシ、並びに其の聲音ヂ、ジより也行に移る拗音につきて一言すべきことあり。抑ナ、シ及び其の聲音はミ、キ等の父音れ如く一箇の原父音なれば、其の母音と結合したるナ-ヤ、シ-ヤの音はマ、カ等に均しき直音にして決してミ-ヤ、キ-ヤ等と並ぶべき拗音にはあらざるなり。故にこれらの音い拗音中に掲せんより寧直音中に収むる方其の當を得たるものならん。

然るに今之を拗音中に收めし所以は元來ナ、シ等の父音ハ顎舌音にして之を發音する時の口内の形狀は母音イを發する時の形狀に尤も近く從て多少イの音を混ぜるが故に其の音伊段より也行に移る他の拗音と相似たる所あるなり、且これらの音を書き表すには他の拗音と相同じき法を以てするが故に本邦にてはこれらを拗音中に收むる方便利なるを覺ゆるなり。

第五章。發呼法の區別。

發音の方法に短呼、長呼、促呼、撥呼の四種あり、之を發呼法と云ふ。

短呼とは、長呼に對する名稱にして、直拗諸音を其の本質の儘に唱ふるをいふ、例へバア、カ、ザ、パ、シャ、ナヤ、ギャ、グワ等の如し。

長呼とは短呼の諸音を殊更に延長して唱ふるをいふ、例へバアー、カー、ザー、パー、オウ、ソウ、ハウ、アウ、サウ、シャウ、ナヨウ等の如し。

促呼とは短呼の諸音を促迫して唱ふるをいふ、例へバアッ、カッ、ザッ、パッ、シャッ、ギャッ、グワッ等の如し。

撥呼とは諸音の音尾を撥ね鼻竅に掛けて唱ふるをいふ、例へバアン、カン、ザン、パン、シャン、グワン等の如し。

備考第一。 長呼音の例中に掲げしオウ、ソウ、ナヨウの三音は文字の儘にオウ、ソウ、ナヨウと讀むときは長呼にあらずといへども、オ、ソ、ナヨを長く延べてオオ、ソオ、ナヨオと讀み做すときは長呼となるなり。又パウ、アウ、サウ、シー

ヤ、ウの四音も文字の儘に讀むときは長呼にあらず、而して之をポウ、オウ、ソウ、シヨウ、ヨウの如く讀み做すは常の事なるが、然るときは長呼なること勿論なれど、其の長呼はバ、ア、サ、シヤの長呼にあらぎしてポ、オ、ソ、シヨの長呼なりと知るべし、これ其の數箇の母音互に約合して其の原音を一變したるがためなり。

備考第二。 音尾のオ或はウに終る長呼にハ長呼の符號としてウ文字を用ひ且上下兩字の間右側に短柱を施すこと拗音の書方の如くし、音尾のア或はイ或はエに終るものには｜の符號を用ふ、例へバソウ、ユウ、ハー、ヒー、エー等の如し。

備考第三。 促呼のッは只促呼の符號として用ふるものなれバ假名のツとは同一のものにあらぎ。抑促呼は急に上なる音尾を遮り止めて下なる音に移らんとする時ッ生ぎるものなり。其の音尾を遮るは口内の一部局の閉合による、而して其の閉合する部分は專下に來る音によりて變ず、即下に來る音舌音なれバ舌と上顎との間閉合し、唇音なれバ兩唇閉合し、喉音なれバ喉部閉合す。又喝音なれバ齒舌之を遮り、齒唇音なれバ唇齒之を遮る、然れども此の二個の場合に於ては氣息の漏脱するあるも、故に此の促呼の符號たるッは其の下に續く音聲の性質によりてプ、ク、ス、ツ、フの五樣に轉ずるものと知るべし。今左に其の一例を示さん。

日天（につてん）　舌。　此の類ハッとなるなり。

日本（につぽん）　唇。　此の類はプとなるなり。
日光（につくわう）　喉。　此の類はクとなるなり。
日蝕（につしよく）　喝。　此の類はッとなるなり。
せつふぶるそん　齒唇。　此の類はフとなるなり。

備考第五。

撥呼の符號なるンも亦其の下に續く音聲の種類によりてヌ又はム又はngの響を表すことは既に第一章に云へるが如し。抑撥音は音尾を撥ねて鼻竅より氣息を流出せしむるものにて鼻音の父音に外ならず。而して鼻音に喉、舌、唇の三種あることゝ子音類別表に掲げたるがごとし。是を以て撥呼音ンの其の次ぎに來る諸音の性質により或ンの舌音となり或ンの唇音となり或ンの喉音となるなり、細しく之を言へば次ぎの音舌音なればヌ

となり、唇音なればムとなり、喉音なればngとなるを通例とす。今其の一例を左に示さん。

論定（ろんてい）　舌　此の類ンヌの響なり。
論鋒（ろんぼう）　唇　此の類はムの響なり。
論語（ろんご）　喉　此の類ンngの響なり。

第六章。　切音。

二音を約めて一音に歸せしむるを切音といふ、即一音の父音を取て他音の母音に結合せしむる法なり。此の法に三種あり、孰れも第一音を父位とし第二音を母位とし以て歸音を求むるものとす。父母兩位とも五十連音同行中に在るときは母位の音を以て歸音と定め、父母兩位とも同段中に在るときは父位の音を以て歸音と定め、父母行と段とを

異にするときは父位と同行にして母位と同段に當れる音を以て歸音と定むるあり、即左の如し。

父母同一の行中に在るもの。

母位——父位
歸音

らりるれろ

けるらしのるちを約めて
けらしといふが如し。

父母同段中に在るもの

父位—た—歸音
母位—ち

つてと
たちを約めて
うたるといふが如し。

父母行及び段を異なするもの。

母位
か—
歸音—さ
父位—し

きくけこ
すせそ

さかれべの さうを約めて
されべといふが如し。

備考。以上三例は連聲の便より因り二音の自然に約まりたるものなれども、其の理より於ては切音に異ならず、且後篇より至り頗必要の關係を有する言葉なれば、適例にはあらざれども、態と摘出して示し置きぬ。

第七章。伸音。

伸音とは切音と正しく相反し一音を伸べて二音となすものをいふ。故に切音の法に從て之を反すときは終に其の本音に歸するなり。されど伸音の用法は古より慣例あることなれば、恣に一音を二音に呼び做すは宜しからず。今其の一二例を左に示さん、但し此の法は主に加行、奈行、波行麻行、良行にあるものと知るべし。

加行にあるもの。

過ぎ。　を　過ぐり。

惜しく。　を　　惜しけく。

奈行にあるもの。

友ならぬ。　を　　友ならなく。

知らぬ。　を　　知らなく。

波行にあるもの。

のたまふ。　を　　のたまとく。

思ふ。　を　　思むく。

麻行にあるもの。

過ぎん。　を　　過ぎまく。

聞かん。　を　　聞かまく。

備考。此のンはムヨ通はセマクと仰べたるものと知るべし。

良行にあるもの。

言へる。　を　　言へらく。

聞くなる。　を　　聞くならく。

第八章。通音及び音便。

通音とは相近き音の互に變通するを云ひ、音便とゝ其の名稱の如く只發音上の便によりて自然に音の轉化したるものなり。音韻の上に於てゝ其の變通轉化すべき所以の理なきヨあらずといへどもここに之を詳說せず。左に其の二三の例を示さん。

男子(だんし)　を　　なんし

千萬(せんばん)を　　せんまん

去べらく　を　　去まらく

と云ふが如きは通音の例なり。

一本(いちほん)を　　いつぽん

夫婦(ふふ)　を　　ふうふ

甲板(かふはん)を　かんばん
さむらふを　さうろう
はとはを　はとんど
ゐみさしを　かんざし
いかにを　いかん
ずゞを　ずんゞ
ありてを　あつて
もちてを　もつて

と云ふが如きは皆音便轉化の例なり。

第二篇。言論。

第一章。名言。

名言とは事物の名を表す言葉なり、月、日、雨、風、ランプ、電信、知慧、品行等の如し。此の言葉は其の用法如何に變化するも語形は更に轉變することなし、故に亦スワリコトバとも云ふ、例へばつきを見る、つきは照らさる、つき白し抔と種種に其の用法を變ずるもつきと云ふ言葉ハ依然として其の形を變せざるが如し。

第一項。名言に三種ある事。

名言に純名言、用名言、合名言の三種あり。

純名言とは月、日、雨、風、清正、信長、武藏、利根川、ランプ、シーヤツ、鐵道、電信等の如き事物の名にして少しも轉化することなき

言葉をいふなり。

用名言とはアソビ、タノシミ、カナシサ等の如く言葉の性質よりいへば語格によりて種種に轉化をる言葉なれども之を言ひすゑて用ふる時は事物の名となりて更ゑ他の名言と異なることなれものをいふ。其の本ゝ用言より轉じたる名言なれば即用名言といふ。

合名言とゝ名言又ゝ他の言葉を綴合して一箇の名言となしたるものをいふ。乃雨雲といへば二箇の純名言を合せたるものゑして、雨降といへば純名言と用名言とを合せ木實といへば二箇の純名言と一箇の後置言とを合せたるものなり、他ゝ推して知るべし。

第二章。代名言。

代名言とは事物本來の名にゝあらざれども他の名言の代りに用ひて事物其の物を代表する言葉なり、例へばコレ、ソレ、カレ、ワレ、アレ、ナンヂ等の如し。

第一項。代名言に二種ある事。

代名言に普通代名言疑問代名言の二種あり。

普通代名言とはワ、カ、ソ、コ、ワレ、カレ、ソレ、コレ、アレ、ア、ナンヂ等の類にして語るもの又は語らるるもの又は語りかけらるるものの名を代表する言葉なり。

疑問代名言とはタレ、イヅレ、ナニ等の類にして只に事物の名を代表するのみならず兼ねて疑問の意を含める言葉なり。

言葉の種類を分て。

純名言又はモ・ナ・用名言又はハ・ナ・合名言にはア・ナ・普通代名言には タ・カ・ナ・疑問代名言にはウ・カ・ナ・の符号を言葉の右に記すべし。これらの符号ハ諸語の訓の一字若しくは數字を取りたるものなり。附錄術語の部を參看すべし。又かかる解剖法は先人の未用ひざる所なれば學ぶ者の曉り難からんことを恐れ此の篇に掲げし問題ハ悉皆之を解剖し置きぬ。學ぶ者勉めて之を諳じ然る後他の文又就きて之を應用せよ。

わらはべ（モ・ナ・）は　あそび（ハ・ナ・）を　このむ。　うれ（タ・カ・ナ・）を　むか（ウ・カ・ナ・）へ　て　これ（タ・カ・ナ・）を　おくる。　かみなり（ア・ナ・）は　でんき（モ・ナ・）の　はたらき（ハ・ナ・）なり。　これ（タ・カ・ナ・）を　まねき（ウ・カ・ナ・）し　は　たれ（タ・カ・ナ・）ぞ。

第三章。　用言。

用言とはアソブ、オツル、ナガシ、シロシ等の如く事物百般の作用又は形状を表す言葉なり。

練習第二。

言葉の種類を分て。（用言にハ・の符號を言葉の右に記すべし。）

つき（モ・ナ・）　たかし（ハ・ナ・）。　かせ（モ・ナ・）　ふく（ハ・ナ・）。　ならひ（モ・ナ・）　せい（ハ・ナ・）　と（ハ・ナ・）　な（ハ・ナ・）る。　この（モ・ナ・）　は（ハ・ナ・）　の（モ・ナ・）　こなた（ア・ナ・）　に　みや（モ・ナ・）　あり（ハ・ナ・）。　みや（モ・ナ・）　の　かなた（ア・ナ・）　に　ひと（モ・ナ・）　の（ハ・ナ・）　を　みる（ハ・ナ・）。

第一項。　用言に三種ある事。

用言ハ作用、形狀、助用の三種あり。作用言とはミル、キク、オツル、アソブ等の如く事物百般の働作を表す言葉にして形狀言とはタカシ、ヒロシ、カタシ、シロシ等の如く事物百般の形狀性質を表す言葉なり。助用言とは他の用言を助けて

其の語勢又は時等を變化するために用ひらるる言葉なり、例へばラルル、シムル、ヌル、ツル、タル、ケル、シ等の如し。

第二項。用言に六種の語格ある事。

すべて用言の語格にハ直說、形容、接續、假定、命令、連用の六種あり。此の語格によりて言葉遣ひの種種に異動するのみならず其の語尾も亦從て活動す、是れハタラキコトバの名ある所以なり。

直說格とハ物の働作、形狀を有りの儘に述ぶる語格なり、此の格を用ふれば言葉の意味斷定停止して下に續くさるが故に**斷止格**ともいふ、春すぐ、花散る、水清し、風烈しといふハ此の格なり。

形容格とは名言の上にありて其の働作、形狀を指示する語格なり。又之を**連体格**ともいふ、常に体言即名言に連接するの謂なり、過ぐる春、散る花、清き水、烈しき風といふハ此の格なり。

接續格とハ約定の意を含めて一の文を他の文に結合する語格なり、例へば「春過ぐ」と「花散る」との間に接續言ばを挾み「春過ぐれば花散る」と改むる時ハ二句相連續し且過ぐれば云云と約定するが如し、花散れば、水清ければ、風烈しければ等皆同じ。

假定格とハ事の未然らざる時より斯くもあらんと假定して豫想像する語格なり、例へば春過ぎば花散らんといふが如し。此の過ギと散ランとハ共に假定格にしてンハラを撥呼音に變せしまでと知るべし。又清し、烈しの假定格は

清クば、烈シクばと轉化す、精しくは形狀言の處に至りて說くべし。

命令格とは下知又い希求する語格なり、過ぎよ、散れ、清かれ、烈しかれといふが如し。但過ギヨのヨい命令格となさんが爲に添へしまでなり、精しくは下に說くべし。

連用格とは用言と用言とを連接せしむる時に用ふる語格なり、例へば散り行く、過ぎ去る抔といふが如し。又春過ぎ花散り、水清く、風烈しく抔と用ふる時い其の意未定まらず所謂言ひ流しの語格となるが故に亦不定格とも云ふ。

以上六個の語格を連合して其の活き方を示せば左の如し。

直說	形容	接續	假定	命令	連用
すぐ	すぐる	すぐれば	すぎば	すぎよ	すぎ
ちる	ちる	ちれば	ちらん	ちれ	ちり

備考。活き方の表中接續格にば假定格にばんと記せるは唯其の語格を示すまでにして深き意あるにあらず、以下之に倣へ。

練習第三。

言葉の種類を分ち用言の語格を示せ。

用言の直說格にいタ。イ。形容格にはヨ。イ。接續格にはツ。イ。假定格にいカ。イ。命令格にはサ。イ。連用格にはナ。イ。の符號を言葉の左上のかたに記すべし。

うま　ゆき　うし　きたる。　そら　かける　とり　を

みよ。　みづ　ながれ　て　あな　に　いる。　かぜ

ふか　ば、　はな　ちらん。　くも　きたれ　ば　つき

かくる。

第三項。作用言に八種ある事。

作用言は其の種類により活き方を異にす、今之を分つ時は八種となる。

第一種の作用言。 此の言葉は四段の活語と稱し五十連音圖の阿、伊、宇、江の四段に活く言葉を云ふ。用言中尤數多き言葉なれども阿、奈、也、和の四行には此の活語なし、其の一例宛を左に示さん。

直説	形容	接續	假定	命令	連用
加行 咲 さく	さく	さけ	さけば	さけ	さき
佐行 推 おす	おす	おせ	おせば	おせ	おし
多行 打 うつ	うつ	うて	うてば	うち	うち
波行 逢 あふ	あふ	あへ	あへば	あひ	あひ
麻行 讀 よむ	よむ	よめ	よめば	よみ	よみ
良行 散 ちる	ちる	ちれ	ちれば	ちり	ちり
波行 逢 あふ	あふ	あへ	あへば	あひ	あひ
麻行 讀 よむ	よむ	よめ	よめば	よみ	よみ
良行 散 ちる	ちる	ちれ	ちれば	ちり	ちり
波行 逢 あふ	あふ	あへ	あへば	あひ	あひ
麻行 讀 よむ	よむ	よめ	よめば	よみ	よみ
良行 散 ちる	ちる	ちれ	ちれば	ちり	ちり

備考。此の類の言葉は直説と形容と同形として、接續と命令とも亦同形なり、然れども語格の相異なるは前項にゝへりて參照せば直に了解し得べし。これより下の作用言にも異格同形のもの又多し、準じて知るべし。

練習第四。

左の言葉をはたらかせよ。

たつ。とる。くむ。さす。ひふ。かる。つく。やる。かいす。ひらく。

さがす。ためろふ。やく。まつ。ひろふ。つむ。もつ。ぞよむ。

第二種の作用言。此の言葉は下二段の活語と稱し宇、江の二段に活く言葉なり。第一種に次ぎて其の數いと多く、五十連音圖中各行に此の活語あり、其の一例宛を左に示さん。

	直說	形容	接續	假定	命令	連用
阿行	得う。	うる	うれば	えば。	えよ	え
加行	受く。	うくる	うくれば	うけば。	うけよ	うけ
佐行	痩す。	やする	やすれば	やせば。	やせよ	やせ
多行	建つ。	たつる	たつれば	たてば。	たてよ	たて
奈行	乘ぬ。	かぬる	かぬれば	らねば。	らねよ	らね
波行	唱なふ。	となふる	となふれば	となへば。	となへよ	となへ
麻行	學む。	まむる	まむれば	めば。	めよ	め
也行	消ゆ。	きゆる	きゆれば	えば。	えよ	え
良行	枯る。	かるる	かるれば	れば。	れよ	れ
和行	餓う。	うる	うれば	うば。	うよ	う

備考第一。此の類より以下の言葉は形容格にル、接續格にレ、命令格にヨを添ふるにあらざれば其の語格をなさず。

備考第二。俗言にては此の言葉の直說、形容の二格をエルといひ、接續格をエレと云ふ例なり、ヤセル、ヤセレバ、ウケル、ウケレバのごとし。

練習第五。

左の言葉をはたらかせよ。

あぐる。まぬる。とむる。もるる。たゐる。つたふる。

そだつる。きする。きこゆる。みだるる。ながむる。

たづぬる。にする。うくる。たつる。

第三種の作用言。

此の言葉は上二段の活語と稱し伊、宇の二段に活く言葉なり、而して其の數稍少く阿、佐、奈の三行より此の活語なし、其の一例宛を左に示さん。

直說 形容	接續	假定	命令	連用
加行 起 れく	おくれば	おきば	おきよ	おき
多行 落 おつ	おつれば	おちば	おちよ	おち
波行 戀 こふ	こふれば	こひば	こひよ	こひ
麻行 恨 うらむ	うらむれば	うらみば	うらみよ	うらみ
也行 老 おゆ	おゆれば	おいば	おいよ	おい
良行 古 ふる	ふるれば	ふりば	ふりよ	ふり
和行 率 ひきう	ひきうれば	ひきゐば	ひきゐよ	ひきゐ

備考。俗言にては此の言葉の直說、形容の二格をイルと云ひ、接續格をイレと云ふ例なり、オキル、オキレバ、オチルオチレバのごとし。

練習第六。

左の言葉をはたらかせよ。

くゐる。つくる。くつる。むくゐる。とづる。こるる。

はろぶる。ゐるる。

第四種の作用言。此の言葉は上一段の活語と稱し、伊の一段にのみ活く言葉なれども形容、接續、命令の三格に各ル、レ、ヨを添へ且直説格にもルを加ふる時は六の語格を備ふること他の言葉と異ならず、故に一段の活語とは稱するなり。而して其の數いと少く左に掲ぐるものの外此の種の言葉あるを知らず。

	直説	形容	接續	假定	命令	連用
阿行	射鑄 いる	いる	いれば	いれば	いよ	い
加行	著 きる	きる	きれば	きれば	きよ	き
奈行	煮似 にる	にる	にれば	にれば	によ	に
波行	干嗔 ひる	ひる	ひれば	ひれば	ひよ	ひ
麻行	見 みる	みる	みれば	みれば	みよ	み
和行	居 ゐる	ゐる	ゐれば	ゐれば	ゐよ	ゐ

第五種の作用言。此の言葉は下一段の活語と稱し江の一段にのみ活く言葉なり、其の狀第四種と同じく其の數も甚少し。

	直説	形容	接續	假定	命令	連用
加行	蹴 ける	ける	ければ	ければ	けよ	け
奈行	寢 ねる	ねる	ねれば	ねれば	ねよ	ね
波行	綜 へる	へる	へれば	へれば	へよ	へ

第六種の作用言。此の言葉と其の活き方と命令格にヨを

添へざるとは稍第一種に似たれども、形容格にルを添へ接續格にレを添ふるは第二種以下の言葉と同じ、故に奈行變格四段の活語と云ふ、此の種はイヌル、シヌルの二語あるのみ。

	直說	形容	接續	假定	命令	連用
奈行	死ぬ。	しぬる	しぬれば	しなば。	しね。	しに。
同行	往ぬ。	いぬる	いぬれば	いなば。	いね。	いに。

第七種の作用言。此の言葉も亦一種の變格として加行の伊、宇、於の三段に活く言葉なり、故に加行變格三段の活語といふ、但クルの一語あるのみ。

	直說	形容	接續	假定	命令	連用
加行	來く。	くる	くれば	こば。	こよ	き。

備考。此の言葉の命令格にいもとヨを添へざるが定りあれども近代は之を添ふるを常とす。

第八種の作用言。此の言葉も亦一種の變格にして佐行の伊、宇、江の三段に活く言葉なり、故に佐行變格三段の活語と云ふ。而して此の類に屬する言葉はスルの一語あるのみなれども論定する、歎稱する、論ずる、感ずる抔と用ふる時は其の用甚廣し。

	直說	形容	接續	假定	命令	連用
佐行	爲す。	する	すれば	せば。	せよ	し。

以上八種の活語を纏め左に其の語尾の變化を示さん。

直說	形容	接續	假定	命令	連用
第一種	ウ	ウ	エば	アばん	エ	イ
第二種	ウ	ウる	ウれば	エばん	エよ	エ
第三種	ウ	ウる	ウれば	イばん	イよ	イ
第四種	イる	イる	イれば	イばん	イよ	イ
第五種	エる	エる	エれば	エばん	エよ	エ
第六種	ウ	ウる	ウれば	アばん	エ	イ
第七種	ウ	ウる	ウれば	オばん	オよ	イ
第八種	ウ	ウる	ウれば	エばん	エよ	イ

練習第七。

言葉の種類を分ち用言の語格及び作用言の種類を記せ。是より以下の作用言には八の符號を用ず專ワの符號を用ふべし。又八種の區別ハ數字を以て示すべし。

さる(モナ)も　き(モナ)より　たつ(ワ三)。(タイ)
うく(ワ二)。(タイ)　かみ(モナ)を　たふとみ(ナイ)(ワ一)　ほとけ(モナ)を　うやまふ(ワ一)。(タイ)
ひと(モナ)を　うらむる(ヨイ)(ワ三)　こと(モナ)　おかれ(サイ)(ハ)。　おい(ナイ)(ワ三)、　やみ(ナイ)(ワ一)、　し(ナイ)(ワ六)
に、くる(ヨイ)(ワ一)しむ　こと(モナ)を　らうび(モナ)やうしく　の　くる(ハナ)し(ナイ)
みと　いふ(タイ)(ワ一)。

てん(モナ)の　たま(アナ)もの　を

第四項。形狀言に三種ある事。

形狀言とゝ所謂シ、キ、クの活語とアリ、ナリ、タリ等の言葉を總稱するものにして其の活き方を大別すれば三種となる。

第一種の形狀言。　此の種の形狀言はシ、キ、ケレ、クと活くものなり、例へばながし、たけし。

直說	形容	接續	假定	命令	連用
ながし	ながき	ながけれど	ながけん	○	ながく
たけし	たけき	たけけれど	たけけん	○	たけく

練習第八。

左の言葉をはたらかせよ。

たかき。　ひろき。　くろき。　せまき。　みドかき。　よき。　まろき。

よき。　ふかき。　きよけき。

第二種の形狀言。　此の種の形狀言はシ、シキ、シケレ、シクと活くものなり、例へばたのし、かなし。

直說	形容	接續	假定	命令	連用
たのし	たのしき	たのしけれど	たのしけん	○	たのしく
かなし	かなしき	かなしけれど	かなしけん	○	かなしく

備考第一。　第一種の形狀言ながし、たけしの類を疊みてながながし、たけたけし抔と云ふ時は第二種の活語となるなり。

備考第二。　形狀言の第一種と第二種とには命令格を缺き又其の假定格には何何ばといふ言葉遣ひなし、尤第三種のカリ、シカリに移して其の缺を補ふを得べし、其の

移し方ハ後に説くべし、又長くば、樂しくば抔と用ひて假定の意を顯すこともあるなり。

練習第九。

左の言葉をはたらかせよ。

よろしき。くるしき。うれしき。さびしき。さかしき。

さわがしき。あやしき。うるハしき。はなはだしき。

むなしき。まづしき。おなじき。たゞしき。

第三種の形狀言。 此の種の形狀言はあり、なり、たり、かり、しかりの類にして其の活き方左の如し。

直說	形容	接續	假定	命令	連用
あり	ある	あれば	あらば	あれ	あり
なり	なる	なれば	ならば	なれ	○
たり	たる	たれば	たらば	たれ	○
かり	かる	かれば	からば	かれ	○
しかり	しかる	しかれば	しからば	しかれ	○

備考第一。 なりはニアリの約、たりハトアリの約、かりはクアリ、しかりハシクアリの約なれば此れらの言葉は他の言葉の語尾にアリの重りたるものなり。例へば人稀なり舉止嚴然たり心廣かり心惡かり抔と云ふハ稀ニアリ、嚴然トアリ、廣クアリ、惡シクアリの意なるがごとし。

備考第二。 茲に云へるたりハトアリの意にして重に漢字の後に添ひて其の用をなすものなり、行きたり聞きた

り抔と用ふるたりとは同形異義の言葉なれば混同せざる様注意すべし。又かりしかりのクアリ、シクアリの意なるは前既に之を云へり、故に形状言第一種並ゟ第二種に缺けたる語格は之を其の連用格よりあり ゟ移して第三種の言葉とあせば補ひ得べくなり。

以上三種の形状言を連綴して其の語尾を左に示す。

	直説	形容	接續	假定	命令	連用
第一種	し	き	けれど	けん	○	く
第二種	し	しき	ーければ	しけん	○	ーく
第三種	り	る	れば	らん	れ	り

練習第十。

左の言葉をはたらかせよ。

たのしかる。すでやかなる。簡單なる。堂堂たる。まれなる。あやしのる。ちののる。卑劣なる。さむのる。鏘鏘たる。天天たる。漠然たる。

練習第十一。

言葉の種類を分ち用言の語格、作用言並ゟ形狀言の種類を記せ。是れより以下の形狀言ゟは符號を記すべし。

つき　しろく　ほし　まれなり。　はる　の　けしき

いと　のどけし。　さくゆる　こよ　の　ながからん

を　いのる。　とし　さむく　して　みづ　こはる　はい

やし。　かせ　はげしかり。　勇氣凜然たり。

第五項。用言に時の變化ある事並に其の助用言の事。

用言には時の變化と云ふことありて其の言樣により過去の事ともなり、又は眼前に成り果てたるさまともなるなり。此の變化を起さに用ふる言葉を時の助用言と云ふ。抑用言の時には現在、過去、完成、過去完成の四種あり、例へば散ルといふは現在に於て散ることを云ひ、散リキ、散リケリといふは過去に於て散りたることを云ひ、散リヌ、散リツ、散リタリといふは眼前に於て散り果てたることを云ひ、散リタリキ、散リタリケリといふは過去に於て散り果てたることをいふ。故にき、けりは過去の助用言にしてぬ、つ、たりは完成の助用言なり、而して此の二者を合せ用ひたるゝ過去完成の助用言なり。時の助用言を添へざるは皆現在と知るべし。

過去の助用言の活き方。

直說	形容	接續	假定	命令	連用
き	し	しゝば	せば	○	○
けり	ける	ければ	けん	○	○

完成の助用言の活き方

直說	形容	接續	假定	命令	連用
ぬ	ぬる	ぬれば	なば	ね	○
つ	つる	つれば	てば	てよ	○
たり	たる	たれば	たらば	たれ	○

過去完成の助用言の活き方。

直說	形容	接續	假定	命令	連用
にき	にし	にしかば	にせば	○	○
にけり	にける	にければ	にけん	○	○
てき	てし	てしかば	てせば	○	○
てけり	てける	てければ	てけん	○	○
たりき	たりし	たりしかば	たりせば	○	○
たりけり	たりける	たりければ	たりけん	○	○

備考第一。けりゝ元來過去の助用言なれども必しも每に過去を表すものにあらず、現在のことばにも只落着治定の意を示し又は感慨の情を表す爲めに添へ用ふること、とあり、例へば「山のはにますみの鏡かけたりと見ゆるゝ月の出づるなりけり」「古郷となりにし奈良のみやこにも色ゝかはらず花ゝさきけり」などいふがごとし。されど言葉の分類にはすべて過去の助用言として可なり。

備考第二。過去の助用言の假定格にせば、けんとのみ記せるはもきせば、ちりせばなどと云ふ言葉遣ひはあれどもゆきせん、ちりせんと云ふことなく、又ゆきけん、ちりけんと云ふ言葉遣ひはあれどもゆきけば、ちりけば、と云ふ事ゝなきが故なり。

備考第三。にき、にけりのニはヌの變化にしてて、てけりのテはツの變化なり、ぬ、つをき、けりと合せ用ふるときゝ必此の形となるものと知るべし。

備考第四。又用言の用ひ方に現在、過去の差別ありて未

來の缺けたるは何故なる甚訝しと謂へる人もあらん。されど我が國の言葉遣ひに未來の缺けたるにはあらず、唯假定格を用ひて其の作用をなさしむるが故に別ゝ未來の時を設けざるのみ、未來の助用言とて一種の言葉あるまもあらざれば此の時を設けざる方却て便利なるべし。但んと撥ぬる假定格ハ直說格の如く又形容格の如く用ふるものなれば直說格形容格に用ふべき諸法則はこれにも相當するもの多しと知るべし。

備考第五。命令格には現在、完成の外時の助用言なく、連用格には全く時の助用言なきは前表を見て知るべし。蓋過去の事を命令するは理に於て固よりなきことなり、又連用格は所謂不定格にて時に關係なく作用、形狀を云ふものなれば此の格に時の助用言なきこと勿論なり。

備考第六。形狀言第一種並に第二種の言葉は現在にのみ用ひて過去又は完成の時に變ずることなし、故に此の言葉の時を變ぜんには先第三種の形に轉じて然る後に時の助用言を添ふべし。

第六項。作用言第一種、第六種並に第八種の言葉は助用言を添へずして完成の時となる事。

此の三種の言葉は語尾をエリ、エル、エレの形に變ずる時ハ助用言を添へずして完成の時となり、又之にキ若しくはケリを加ふるときは過去完成の時となるなり、例へば第一種のゆくをゆけりと云ひ、第六種のしぬるをしねりと云ひ、第

八種のするをせりと云ふが如し。其の活き方左の如し。

直説	形容	接續	假定	命令	連用
エり	エる	エれば	エらば	エれ	○

練習第十二。

言葉の種類を分ち、用言の語格並ょ時の區別を記せ。

時の助用言には現在にはゲン。過去にはト。タ。の符號を言葉の右に記し過去完成にはクワコ。完成にはクワン。に記すべし。尤も是れより以下の作用言と形狀言とは其の種類を分つに及ばず。

はるは　きにけり。　ゆき　つもりにけれ　ば。

はなの　ちりはてのせのためならば。

ここにひとまるといへるひとありけり。

すぎにしことなりけり。

ずらへてもなりねとみなもらしつ。

かれいなみしかば　すべもなし。

きてみつねてみつかやのひろさかな。

ん。

けり。

第七項。作用言に自動他動の二種ある事。

作用言に自動他動の二種あり。自動の作用言とは其の作用を受くるものなき言葉をいひ、他動の作用言とは其の作

用を受くるものある言葉をいふ。例へば「人立つ」といへば立つといふ作用は只之をもるものあるのみにて受くるものはなし、故に自動なり。又「人家を建つ」といへば建つる人と建てらるゝ家とあり、即建つといふ作用をするものと此の作用を受くるものとあるなり。作用を受くるものを作用の目的といふ。目的は常にヲといふ辞にて作用言に係るなり。例へば「花を見る」「聲を聽く」「ものを食ふ」のごとし。但し此のヲ辞を略することもあり、例へば「聲聽く」「もの食ふ」のごとし。ヲの外なる辞にてうくるものはすべて他動にあらず「山にのぼる」「馬にのる」の類皆自動なり。

備考。 他動作用言は通常其の目的たる言葉より直に連なれども又他の言葉を隔つることあり、又形容格となりて其の目的を形容することあり、又同文中已に他に其の目的たる言葉ある時又は其の目的たるもの言はずして明らなる時は之を略することあり。又目的たる言葉はヲ、ヲバ、ヲモ、ヲゾ、ヲコソ、ヲカ等の辞にて受くること常なれども、ヲ辞を略して只ハ、モ、ゾ、コソ、カ等のみにて受くることもあり。かかる場合にはヲ辞を加へて意味愈明かなるべし。例へば「花ちらす風のやどりはたれか知るわれに教へよ。」といふ例にて花はちらすの目的なるがヲ辞を略せり、やどりは知るの目的なるが誰れのといふ言葉を隔て且ヲ辞を略して只ハ辞のみにて受けたり、之をヲバとすれば意味愈明らなり、教へよの目的もやどりなるがこれは既に上にある故に重ねて云はざるなり。又「我

が持てる筆「りける字」など云ふは目的たるものを形容する例なり。

作用言は自動のみなるものあり、來る、泣くの類なり、又他動のみなるものあり、持つ、食ふ、飲むの類なり、又自動にも他動にも用ひらるるものあり、吹く(風吹くは自動、笛を吹くは他動)笑ふ(人笑ふは自動、人を笑ふは他動)の類なり、又自動他動形を異にするものあり。自他により形を變ずる法は種種なれども之を大別すれば、活用によるもの、他動作用言の語尾スとなるもの、自動作用言の語尾ルとなるもの、他動作用言の語尾スにして自動作用言の語尾ルなるもの、の四種とす其の例左の如し。

第一種。活用によりて自他の區別あるもの。

第一類	自動 たつ	他動 たつ(ル)	自動 すすむ	他動 すすむ(ル)	自動 つく	他動 つく(ル)
第二類	自動 やく(ル)	他動 やく	自動 きる(ル)	他動 きる	自動 とく(ル)	他動 とく

第二種。他動作用言の語尾スとなるもの。

第一類	自動 うごく	他動 うごかす	自動 おどろく	他動 おどろかす	自動 なる	他動 ならす
第二類	自動 もゆ(ル)	他動 もやす	自動 にぐ(ル)	他動 にがす	自動 さむ(ル)	他動 さます
第三類	自動 つく(ル)	他動 つくす	自動 ゆる(ル)	他動 ゆるす	自動 おふ(ル)	他動 おふす
第四類	自動 おつ(ル)	他動 おとす	自動 れく(ル)	他動 おこす	自動 ほろぶ(ル)	他動 ほろぼす

第三種。自動作用言の語尾ルとなるもの。

第一類	自動 とむ(ル)	他動 とまる	自動 おつむ(ル)	他動 おつまる	他動 すつ(ル)	自動 すたる

第四種。他動作用言の語尾スにして自動作用言の

語尾ルなるもの。

他動	自動	他動	自動	他動	自動
第一類 たす	たる	なす	なる	かへす	かへる
第二類 たふす	たふる(ル)	ながす	なかる(ル)	あらはす	あらはる(ル)

此の外猶種類多けれどもここには尤普通なるもののみを擧げたり。割弧の中にルの字を記せるは中二段活、下二段活の言葉なり。但第二種の第三類第四類は中二段活なれども其の他は皆下二段活なり。又(ル)を附けざるは皆四段活なり。

練習第十三。

左の自動作用言を他動の形にかへよ。

ひろがる。ならぶ。ちる。いる。(入)けがる(ル)。さがる。

まぢふ。とをざかる。ぬぐ(ル)。をはる。のこる。つひ(ゐ)る(ル)。たいらぐ。をさまる。なほる。つづく。わる(ル)。

左の他動作用言を自動の形にかへよ。

すます。くはふ(ル)。くづす。そだつ(ル)。ふかす。かふ(ル)。(換)ととのふ(ル)。へす。おぢす。はじむ(ル)。やぢす。あかす。(夜ヲ)をる。(折)くらす。やわらぐ(ル)。いたす。すう(ル)。さく。

練習第十四。

言葉の種類を分ち、用言の語格、時及び自他の區別を記せ。

自動作用言にいジ。他動作用言はいヲ。の符號を言葉の左に記すべし。

うづら　なく。（タイゲンジ。）　の　に　いで　て　わかな　つむ。（タイゲンダ。）

はな　ちらす　かぜ　の　やどり　は　たれ　か　ゐる、（タイゲンダ。）

われ　に　をしへよ　ゐき　て　うらみん。（カイゲンジ。）　きり　たに（ナイイ。）

ち　て　かり　なく。（タイゲンジ。）　わが　やど　は　ゐき　ふり（ナイイ。）

ふき　て　みち　も　なし、（タイゲン。）　ふみ　わけ（ナイイ。）　て　とふ　ひも（ヨイゲンダ。）

とし　なけれ　ば。（ツイゲン。）

第八項。用言に五種の語勢ある事並に其の助用言の事。

用言の語勢に〻常態。受働態。令働態。被令働態。令受働態の五種あり。

常態と〻普通の語法にして受働態と〻他より云云せらるる語法、令働態とは他に云云さする語法、被令働態とは他より云云させらるる語法、令受働態とは他に云云せられしむる語法を云ふ。例へば教フルと云ふ〻常態にして教ヘラルル〻受働態、教ヘサスル教ヘシムルは令働態、教ヘサセラルル、教ヘシメラルルは被令働態、教ヘラレサスル、教ヘラレシムルは令受働態なり。されば常態の語勢を變じて受働態となさんにはラルルを用ひ、令働態となさんにはサスル、シムルを用ひ、被令働態若しくは令受働態となさんにはラルルとサスル又ハシムルとを上下に置きかへて用ふるなり、故にラルル、サスル、シムルの三語を語勢の助用言と云ふ。

其の活き左の如し。

受働態の助用言の活き方。

直説	形容	接續	假定	命令	連用
らる	らるる	らるれど	らるれば	られよ	られ

令働態の助用言の活き方。

直説	形容	接續	假定	命令	連用
さす	さする	さすれど	させば	させよ	させ
しむ	しむる	しむれど	しめば	しめよ	しめ

備考。 他動の作用言ハ目的ある作用を表すことばなれば、これが受働態は其の目的たるものを文の主として云ふ形まて「人を打つ」といふを言ひかへて「人打たる」といふがごとし。 自動の作用言に至てはもとより目的なきが故に其の受働態は極めて稀なる場合の外受働の意を表すことなし。 其の稀なる場合とは「人にあはれ」「夫にゆかれ」「子に死なれ」など云ふ場合なり。 受働態は又自動他動に拘らず能意と敬意を表すことあり。 能意とは能く事をなし得る意まて「片手に提げらる」「一日には行かれド」などいふ類なり。 敬意を表すとは例へば「誰某には某地に向て出立せられたり」と云ふが如し。 令働態も亦敬意を表すために用ふることあり、例へば「出でさせ給ふ」など云ふがごとし。 然れども敬意を表すに最も多く用ひらるるは被令働態なり「例へば「出御あらせられ」「立太子の式を擧げさせらる」などいふがごとし。

練習第十五。

語勢の助用言にはゴ。タ。の符號を其の右に記し、其の常態にはタゥゴ。受働態にはウ。コ。命働態ゐはス。ゴ。被命働態ゐはス。ラ。ゴ。命受働態にnソ。サ。ゴ。を其の左に記すべし。

ミチ　を　をしふる　は　わ　が　つとめ　なり。　こ＝

れ　を　さとら　しむる　は　わ　が　ねがひ　なり。

いとど　まなび　の　ミち　ゐ　こころ　を　とめ　さ＝

せ　らる　と　いふ。　かかる　あな　にて　くひ

つゝれ　な　は　あしのらん　と　をもひ　て　うつぼ

より　そと　へ　ねどり　いで　けり。　にんしゆでん

の　かた　に　より　て　ゐ　られ　たる　は　くれ＝

たけ　なり。

備考。作用言第一種第六種並に形狀言第三種の言葉に語勢の助用言ラルル、サスルを添ふる時は其のラ、サの音をはぶきて唯ルル、スルのミを付くるが定例なり。これ此の三種の用言より語勢の助用言に移る語尾はアの韻にしてラサも亦アの韻なるがゆゑに音便の然らしむる所なり例へばうたらるるをうたるる、あそばさするをあそばする、あらさするをあらそる、といふが如し、尙音論反切の處を參見すべし。但此の類の言葉をしるすには直に何るる何すると續けさまに書き綴れども言葉の類別

をなさんには其の差別を明にすべきは勿論のことあり。

第九項。否不の助用言の事。

否不の助用言とは用言れ意味を打ち消す爲めに用ふる言葉なり、例へば行くを行かず有るを有らずと云ふが如し。

此の言葉も亦一種の活語にして其の活き左の加し。

直說	形容	接續	假定	命令	連用
ず	ぬ	ざる	ねば ずば	ざれ	ず
	ね	されば	ざらん	○	

備考第一。 此の言葉の假定格はいずんばといふと云ふ言葉遣なし、又時の助用言キ、ケリに續くときは其の形を變へてざりき、ざりけりと云ふが定まりなり。（別のことなり。）

備考第二。 何何せじと云ふ言葉遣ひのジはズの變せしものなれども俗言スマイの意にしてズの未だからざる言葉なりと云へり、尙直說格に用ふる定めなり。又デといへる言葉あれども此はズシテの約なれば其の心して解剖すべし。

練習第十六。

言葉の種類を分ち、用言の語格、時並に語勢をたるせ。

（否不の助用言には ウ・タ・ の符號を言葉の右に記すべし。）

はな（モナ・）　いまだ（ウ・タ・）　ひらか（ウ・タ・）ず（カ・ウ・タ・ゲン・ジ・タ・ゴ・）　むこの（モナ・）し　は　ものを

おもは（ワ・）ざり（ウ・タ・）け（ト・タ・）り（ト・タ・）。（タ・イ・クワコ・タ・タ・ゴ・）　みは（ワ・）て（ウ・タ・）ぬ（ウ・タ・）ゆめ（モナ・）の　さむ（ワ・）（ヨ・イ・ゲン・タ・タ・ゴ・）（ヨ・イ・ゲン・ジ・）

あ（ワ・）（カ・イ・ゲン・ジ・タ・ゴ・）ず（ウ・タ・）ば　なに（ウ・カ・ナ・）を　たま（モナ・）の

る（サ・）なり（ト・タ・）け（ト・タ・）り（ト・タ・）。（タ・イ・クワコ・タ・タ・ゴ・）

を（モナ）　に　せん（ワ）。　つきよ（アナ）　には（ワ）　こ（ワ）ぬ（ウダ）　ひと（モナ）　まこ（ワ）

（カイゲンタタゴ）　（ヨイゲンジタゴ）　（タイゲンタ）

あき（モナ）　き（ワ）ぬ（トタ）　と　め（モナ）に　は　さやかに（ワ）　みえ（ツイゲンジ）

（タイクワンジタゴ）

ども。　かれ（タカナ）　かならず　これ（タカナ）を　ゆるさ（ワ）ざら（ウタ）

（カイ）　（ゲンタ）

る（ウゴ）。　ん（タゴ）。　すべ（モナ）の　まつや（アナ）ま　なみ（モナ）　さ（ワ）じ（ウダ）　とは。

（タタ）　（タイゲンタタゴ）

ぬ（タゴ）

第十項。　治定の助用言の事。

此の言葉は他の用言の意味を治定し又は之を強むる爲めに用ふるものなれば之を治定の助用言と名付く、但多くは推量の意を含める言葉なり。

治定の助用言の活き方。

直說	形容	接續	假定	命令	連用
べし	べき	べけれど	べけん	べく	
べかり	べかる	べかれど	べからば	べく	
まじ	まじき	まじけれど	まじけん	まじく	
めり	める	めれど	めらば	めく	
なり	なる	なれど	なら	なく	
らん		○	○	○	
らし		○	○	○	

備考第一。　前表に揚げしナリは花の衣にあらぬなり、人まつ虫の聲すなり、抔と用言の直說格より受くるナリにして形狀言のナリとは異なり、混同すべからず。　又ラン、ラシには形容格以下の言葉遣ひなし、然れどもランはこそのかかりとハラメと其の形を轉じて結ぶことあり、精

しくは文論に至りて説くべし。但しラシは如何なる結びにても其の形を轉ずることなし。

備考第二。 以上四種の助用言の外にマス、マツル、タテマツル、ハベル、マヰラス、タマフ、タマフルといふ言葉あり。此れ等はもと一定の意味を具へたる作用言なれども今は只崇敬の意を表するまでに他の用言に添へて用ふることあるなり。かかる場合には崇敬の助用言と名付けて此の部中に收むべきものなり。

練習第十七。

言葉の種類を分ち用言の語格時並に語勢をあらはせ。

治定の助用言には号を言葉の右に記すべし。の符

いまは　はや　もみぢば　も
ひとの　まもる（ゲンタイ）べき　みち　を　りんり　と　いふ。
みむろの　やまに　ちぐれ　ふる（ゲンジタイ）らし。　たつた（ゲンタイ）
がは　もみぢ　みだれ（ゲンジタイ）て　なが（ゲンジタイ）るめり。
かれな（ゲンジタイ）ば　こひしかる（ゲンタイ）べし。　たち（カイ）わ（カイ）
と　いふ（ゲンタイ）べかり（クワヨウタイ）けり（ゲンタイ）。　あだなる（ヨイゲンタイ）もの
の　いのち　を。　たに（ヨイゲンタイ）の　うぐひす（ヨイゲンタイ）さる（ヨイゲンタイ）と
つぐ（ゲンジタイ）なり（ゲンジタイ）。　てり（ゲンジタイ）わたる（ゲンジタイ）らん（ゲンタイ）。
ありはつ（ヨイゲンタイ）まじき（ヨイゲンタイ）つも（ヨイゲンタイ）

第四章。 副言。

副言とは用言に添ひて其の意味を種種に變ずる言葉を云ふ、例へば行くことをはやく行く、たそく行く、みだりに行く、わざと行く、はじめて行く、かならず行く抔と副言を添へて云へば行くことの意味自ら變ずるが如し。

備考。 此の言葉には純粋に副言なるもあり、又はやく、おそく等の如く形狀言の連用格なるもあり、又けつして、はたして等の如く作用言の連用格にて文字を添へたるもあり、字句の意を味ひて其の區別をたつべし。又他の言葉にト、ニ等の文字を添ふれば直に副言となることあり、ここに、まことに、はるかに、りんぜんと抔といふ類なり。

練習第十六。

言葉の種類を分ち、用言の語格、時並に語勢をゐるせ。

副言はンッ。の符號を言葉の右に記すべし。

ここに ひと(タイゲンタゴ)あり。くも(モナ)の たもむろに(ヨイゲンジタゴ)すぐる(ワ)を(タイゲンタタゴ)みる(ワ)。はなゐだ(ソモナ)がてん(ヨイゲンジタゴ)ゆかぬ(ウタ)ことなり(タイゲンタゴ)。さだめて(ソタカナ)これは(ヨイゲンタゴ)よき(サ)こと(モナ)なる(タイゲンタゴ)べし(ダタ)。いの(ソ)に(ワ)ちれ(ワ)と(サイゲンジタゴ)の(モナ)かぜ(モナ)れ(ワ)も(ヨイクワンジタゴ)ちれる(ワ)はな(モナ)かな。はるがもと(タイゲンジタゴ)ふく(ワ)らん(ザタ)。はろなく(ソ)の(ヨイクワンジタゴ)やま(モナ)よ(ヤタ)たち(ワ)よけり(トタ)。はるがもと(タイクワコクワンジタゴ)はや(ソ)かすが(モナ)く(タイゲンジタゴ)ふく(ワ)らし(ヤタ)。はるかせ(ナ)の(ソ)いた(ソ)

第五章。後置言。

後置言とは一般に他のことばの後につきて其のことばと他のことばとの關係ヲ示シ又は指示疑訝等の意を表す言葉なり。之を分けて關係の後置言、指示の後置言、疑訝の後置言の三種とす。

關係の後置言とは專ら名言又は他の言葉の後にありて其の言葉と他の言葉との關係を示すものなり。今此の言葉を枚擧すれば大凡左の如し。

が。　の。　に。　を。　と。　より。　まで。
まて。　へ。　から。　つ。

指示の後置言とは名言又は他の言葉の後にありて其の意味を或は強め或は限り或は別ち或は合はせ或は是ぞと指示する言葉なり。今此の言葉の主要なるものを枚擧それば大凡左のごとし。

は。　ば。　が。　も。　ぞ。　の。　のみ。　こそ。
さへ。　だに。　すら。　なん。　がてら。　ばかり。

備考第一。　ノ、ガの二言葉は關係の後置言と指示の後置言とに重出せり、これ同形異義の言葉なればよくよく注意すべし。即關係の後置言のガは梅が香、松が枝抔と用ふるガにして唯言葉の關係を示すものなれども指示の後置言のガは「鳥が鳴く」「花が咲く抔と用ふるガとして其の鳥其の花を指示する言葉なり。又關係の後置言のノは梅の花、松の葉抔と用ふるノにして關係の後置言のガ

とほぼ同義なれども指示の後置言のノは「鳥の鳴く」「花の咲く」抔と用ふるノなれば其の意も亦指示の後置言のガと相似たるものと知るべし。

備考第二。 指示の後置言中に在るバは何ナバと用ふるバにしてハの音便によりて變化せしものなれば接續言のバとは異なり、又ナンはジに通ふナンにしてゆきなん、ゆかなん抔と用ふるナンとは異なり。

疑訊の後置言 とは疑ひの意を表し或は質疑の時に用ふる言葉なり。而して多くは名言の後に置くを通例とすれども字句の摸樣によりては必しも然らず、但し質疑の時には句末に置くを定例とす、例へば「親のうまざる人やある」、「花か霞かわけやらぬ抔と用ふれば句の半にありて名言の後に添へる例なれども「逢ふことの斯くてや、竟にやミ乃夜の」抔と用ふれば他の言葉の後に添ひ「汝之を知れりや」「汝之を疑ふか抔と用ふれば句末に有りて質疑の語法となるが如し。此の種に屬する言葉は左の二語あるのみ。

や。　か。

備考。 ジ、ノ、ヤ、コソ等の後置言を用ふる時は其の下に來る用言の形に一定の變化を生ず、例へば、人あり、人やある、人のある、人ぞある、人こそあれ、のごとし。これを言葉の係り結びと云ふ。かく係り辞によりて用言の形變するも格は尚直説格なり、例へば人ぞあるのアルは其の形形容格なれどもこれはゾの係りゐよりて生じたる變化なれば猶其の直説格たることを失はざるがごとし。係り

結びのことは尚文論に至り詳説すべし。

練習第十九。

言葉の種類を分ち、用言の語格、時並に語勢をしるせ。

關係の後置言には カ・ア。指示の後置言には サ・ア。疑訝の後置言にハ ウ・ア。の符號を言葉の右に記すべし。

いろ は [のはら ぞ] も な ハ [さき けり。] ひと に [しられ ぬ] はな や [さく らん。] はな ほか ふ る ひと も [たゝ なし。] み て の み や かく [ばかり をし と おも。]

ふ よ を いたづらに ね て [あかす らん] ひと さへ ぞ うき。 われ ぞ よるべ も なき こゝ ち [せ ー。] ハかが は [すべき] そで の おづ く を。 ゆき と の み ふる だに ある を さ くらはな いかに ちれ と か かせ の [ふく ら ん。]

第六章。 接續言。

接續言とは言葉と言葉とを連接し又ハ文と文とを連接する爲めに用ふる言葉を云ふ、例へば「我と汝と共ゐ行かん」「我

去れば彼も亦去る[風來りて花散りぬ]と云ふが如し。此の言葉の主要なるものを擧ぐれば大凡左のごとし。

て。　して。　と。　とも。　ど。　ども。　つつ。

ば。　ながら。　を。　に。　が。

練習第二十。

言葉の種類を分ち。用言の語格、時並に語勢をなるせ。

接續言には〻の符號を言葉の右に記すべし。

ちから　を　も　[いれず]　して　あめつち　を　[うで]

かす。　もみぢば　の　[ふり　かくし　て　し]　みち

を　みながら。　[たち　わかれ　な]　ば　[こひしかる]

261177

べし。　[なく]　よ　みやこ　は　のべ　の　わかな

はるがすみ　たてる　や　いづこ　みよしの　の　よし

の　の　やま　に　ゆき　は　ふり　つつ。　はるが

そみ　なに　[かくす　らん]　さくらばな　ちる　ま　を

たに　も　[みる　べき]　もの　を。　[ちり　ぬ]　とも

か　を　たに　の　こせ　うめ　の　はな　こひしき　と

き　の　おもひで　に　せん。

みやま　は　まつ　の　ゆき　だに　[きえ]

[つみ　けり]。

第七章。感歎言

感歎言とは感歎、悲哀、驚愕、喜悅等の感情を表す言葉なり、例へば、ああ哀し、あな怖ろし、あはれ救ひてよ抔と云ふが如し。又やすめ言葉と稱し字句の間に挾みて語路の緩急を調ふるまでに用ふる言葉あり、此れ亦此の中に收むべし。例へばさやかにをなけ、人しなければ抔と云ふヲ、シの如し。今此の言葉の主要なるものを擧ぐれば大凡左の如し。

あ。　ああ。　あな。　あや。　あは。　あら。
あなや。　や。　やも。　やをら。　い。　を。
し。　あれ。　かな。　かし。　がも。　がな。
よ。　な。　ゐ。　え。　も。

練習第二十一。

言葉の種類を分ち用言の語格、時並に語勢をしるせ。

感歎言には（ナゲ）の符號を右にしるすべし。

はな（カア）を（ナゲ）ー　みれ（ワ）ば（ツイゲン・タタゴ）　うき（サ）こと（モナ）も（サア）あし（サ）。（タイゲン・タゴ）　も（モナ）の（カア）を（ワ）おもふ（モナ）ころ（カア）かな（ナゲ）。（ヨイゲン・タタゴ）　あな（ナゲ）はらぐろ（カア）の（モナ）きみ（カア）の（モナ）こころ（カア）や（ワ）。（ヨイゲン・タタゴ）　あきかぜ（サア）い（ナゲ）けふ（カア）より（カア）ふき（ワ）ぬ（トタ）わ（タカナ）が（カア）み（モナ）かなし（サ）ー（ナゲ）も（ウカナ）たれ（サア）も（サア）みな（モナ）つも（カア）の（モナ）み（サア）ぞ（ナゲ）かし（サ）。（タイゲン・タゴ）　さらに（ナゲ）し（サア）も（モナ）よ（サア）の（ソ）いとはしき（タイゲン・タゴ）。　いとど（ソ）あたなる（ヨイゲン・タゴ）　な（モナ）を（ナゲ）や（カア）たち（カイグワン）とり（ワ）て（ツ）を（ナゲ）なん（トタ）。（ジタゴ）　も（ア）かん（カイゲン・ジタゴ）　あきはぎ（ア）の（カア）はな（モナ）。

ああ　ちうしん　なんしの　はか。

第三篇。文論。

文章の組織を論ずるには先起結三轉の法を明かにし、次ぎに文章の分解、言葉の關係等を說かざるべからず。元來文法上より言葉の關係を說き然る後論理的に之を分解するは普通の順序なれども一たび分解法を明めたらんには言葉の關係は自から曉り得べきものなるが故に今ハ文章の分解を說き然る後ゐ言葉の關係を說かんとす。

第一章。起結三轉法。

起結三轉法とは從來之を已爾乎波ゑ調と稱し上文に顯る係辭の如何によりて結語の形三樣に轉化する法を云ふ、乃、ハ、モの結び、ゾ、ノ、ヤ、カの結び、コソの結び、是れなり。ハ、モ、ゑ結びとはハ、モ等の後置言上文に添ハる時尋常の

直説格によりて其の文を結ぶを云ふ例へは「花ハ散りけり」「風モ寒かりき」と云ふが如し。されば此の法は唯他の二法に對して一格と立つるまでにて尋常の結語法なりと心得べし。

ゾ、ノ、ヤ、カは結びとはゾ、ノ、ヤ、カ、ガ、ナン等の後置言上句に添はるとき其の結語變ドて形容格の形となるを云ふ例へは「花ぞ散りける」「いふ人のなき」「さよやふけぬる」「なにかつねなる」「人なんありける」「君がきませる」と云ふが如し。

コソの結びとは後置言コソの上句に添はる時其の結語變じて接續格の形となるを云ふ例へは「名にこそ立てれ」「人こそしらね」と云ふが如し。

抑これら係り結びの相應して變轉するは特に讀む者の注意を惹かんと欲する言葉の下に其の意味を強むる言葉を置くによりその餘勢延て結語に及び自から其の形を變ずるなり。而してハ、モの結びは尋常の云ひかたとして輕く、ゾ、ノ、ヤ、カの結びの意味を強むること稍重く、コソの結びは愈重きを以て若し此れ等の言葉相重なることあるときは、重き方の格によりて結ぶべし例へは「聲聞く時ぞ秋はかなしき」「音羽山のけさはかをめる」「人はおとつれもせぬ」「雪とのみこそ花は散るらめ」「さこそ嵐のれとのかはらめ」「さこそは人の戀しかるらめ」と云ふが如し。但しゾ、ヤ、コソの相重なれる例は絶えてなきことなり。

備考第一。 ハ、モ、ゾ、ノ、ヤ、カ、ガ、コソ等の係辞なき時は之を徒(タダ)の係り結びと云ふ。徒の結びは常のハ、モの結びに同

じく「霞こめたり」「風寒し」など云へども、意味を強めて感慨の情を表す時は形容格にて結ぶことあり。例へば「春來にけりと驚かれぬる」「今日をわかれと思はざりける」「千代しも經たるこちのみする」「殘る松さへ峰にさびしき」「さへづる鳥の音さへかはらぬ」なぞのごとし。

備考第二。 ナニ、タレ、イカニ、イヅレ、イヅク、イク、ナド、ナゾ等の疑問語を總稱して何の係りと云ふ。これらにハ大抵常にカの辞添はるが故に其の結びは固よりカの結びなり。然れどもナド、ナゾ等ハカの辞添ハらざるも形容格にて結び、其の他はカの辞添はらざる時は直説格にて結ぶが多し。例へば「世の中は何か常なる」「神代よりいく世かへにし」「なぞ九重にさかずなりにし」「なぞ世の中の玉

たすきなる」などは形容格にて結べり。又「色かへぬ松も なになり」「長濱のまさごの數もなにならず」「我髪の雪といそべの白波といづれまされり」「いくよになりぬ」「よどの川霧いくよへだてつ」などは直説格にて結べり。

備考第三。 ンと撥ぬる假定格はヅ、ノ、ヤ、カの結びにハ其の儘に用ひ、コソの結びには其の形をメと改むるが定例なり。ヲンも亦同じ、但しヲシハ何れの結びにても其の形を轉ずることなし。

起結三轉法の表。

種名	ハ、モの結び	ヅ、ノ、ヤ、カの結び	コソの結び
第一種	ウ	ウ	エ

種名	ハ、モの結び	ヅ、ノ、ヤ、カの結び	コソの結び
敬勢の助動詞の用言	ら る	ル	ルル	ルレ

作用言				形狀言			時の助	
第二三種	第四種	第五種	第六七八種	第一種	第二種	第三種	ぬ	つ
ウ	イル	エル	ウ	シ	ジ	リ	ヌ	ツ
ウル	イル	エル	ウル	キ	シキ	ル	ヌル	ツル
ウレ	イレ	エレ	ウレ	ケレ	ジケレ	レ	ヌレ	ツレ

語勢の助	否定の助	治定の助				用言	
さす	しむ	ず	べし	なべかりめりり	まじ	らん	らし
ス	ム	ズ	シ	リ	ジ	ン	シ
スル	ムル	ヌ ザル	キ	ル	ジキ	ン	シ
スレ	ムレ	テ ザレ	ケレ	レ	ジケレ	メ	シ

用言	
き	たり けり
キ	リ
シ	ル
シカ	レ

完成の時よ變する言葉	んと撥ぬる假定格
エリ	ン
エル	ン
エレ	メ

練習第二十二。

次ぎの文をヅ、ノ、ヤ、カ若しくはコソに結びに變へよ。

我が宿は雪ふるときて路もなし。末の松山波も越えなん。

試驗もすとき。落第もせず。範頼は頼朝の弟なり。月の

くれけり。雪消る時あり。花を見き。春立つ今日の風や

解くらん。時は得難くして失ひ易し。膽たましひもなき

心地す。藪醫は蛇蝎よりもれそろし。山のもとぢも今は

散るらし。君ゐたづねまるらせん。人見えず。

第二章。文章の分解。

文章には文と句との差別あり、文とは文意の完結せるものを云ひ、句とは其の未完結せざるものを云ふ。故に短き辭にても文あるあり。長き辭にても却て句なるあるなり。然るを世乃人動もすれば文といふ長きものにして句とは短きものなりと心得るは大なる誤りと云ふべし、乃「花散る」といへば短かけれども其の意完結して文なり、「花散る時に」といへば長けれども文意完結せずして句なるが如し。抑文には必主語と確定語との二種なかるべからず、此の二種ありて其の意始めて完結せ。故に如何に冗長なる辭句にても之を分解すれば主確の二種に歸せざるはなし。されど確定語若し他動作用言なる時は其の作用を受くる語あるべし之を客語といふ。

主語とは作用をなし又は形狀を顯せる主体の語を云ふ、乃「花散る」といへば散る作用をなすものは花なり、「月白し」といへば白き形狀をあらはせるものは月なり、故に花は散るの主語にして月は白しの主語なり。

確定語とは主語の作用若しくは形狀を確定する語にして一たび此の語を下すときは其の主語の作用、形狀一定して復動かず、乃「花散る」と云へば此の花のわざは散るに確定して其の他にあらず、「月白し」と云へば此の月のさまは白きに確定して其の他の色にあらざるが如し。

客語とは主語の作用を被むる語なり、例へば「風木を倒す」と云へば木は倒すといふわざを被むるものにて乃客語なり。

確定語他動作用言なる時は客語ありて始めて文意完結せ

るなり、「風倒す」にては文意未完結せざるがごとし。

如何なる文にても之を分解すれば主確の二部に分るるは前に云へるが如くなれども、今「梅の花盛に開く」と云ふ文を見れば單に花と云ふ主語と開くと云ふ確定語のみにあらずして尚梅の盛にといふ言葉あり。梅のは主語に屬し盛には確定語に屬すれどもこれらをすべて擴張語といふ。

擴張語とは名言又ハ用言に附屬して其の意を擴張布演し又は變換するものと云ふ、例へば花に加ふるに梅の、の二語を以てする時ハ此の花は梅の花なりと布演し、更に白きの一語を加ふれば此の梅の花は白き花なりと擴張するが如し。

されども梅の花と云ふも又白き梅の花と云ふも分解にては一つの主語と見做して分解し然る後に其の眞實主語ハ花にして白きも梅のも共に花の擴張語なりと解剖するなり。又開くといふ用言に盛にといふ副言を添ふれば花の開き方に一層の趣を加ふる事となるなり、故に盛にを開くの擴張語と稱す、而して此の語は素より確定語に屬するものなるが故に之を分解するときは其の部中に入るるなり。

文の組織に單純、複合の二種あり。複合文は單純文を二個以上合はせたるものなり。故に複合文には二個以上の主格又は確定語あるものあるべし。例へば「我れも汝も文法を學びたり」といふ文にてハ一の確定語に二個の主語あり、蓋此れハ「我れ學びたり」「汝學びたり」と云ふ二箇の文を我れも汝もと複合の組織を用ひて一文となせるものなり、故に

接續言等によりて連接せる複合文い總べて此の例よりに二箇以上に分ちて解剖すべし。

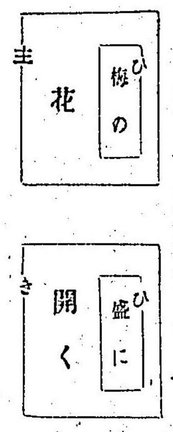
句とは意味の完結せざるものなることは前既に說きたるが、是れ唯其の組織の文を成さざるのみよて其の句中に主、客、確定の三部を有せざるにはあらず。又文中の主、客、確定三部中にも更に又此の三部を具ふることあるなり、次ぎに掲ぐる例によりて之を辨へ知るべし。

分解法。

第一例。

此の例い主語確定語に擴張語を添へたるを示す。

梅の花盛に開く。



此の文は花と云ふ主語と開くといふ確定語より成れるものなり。

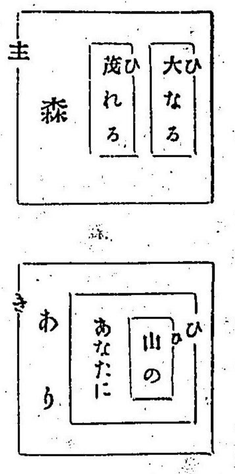
梅のに花の擴張語、盛にい開くの擴張語なり。

上方の輪廓は主部よして主の字を廓の左邊に記し、下方の輪廓は確定部にしてきの字を記せり。而して兩廓內又各小輪廓を畫きて擴張語を收め廓の右邊にひの字を記せり。以下圖式皆之に倣ふ。

第二例。

此の例い主語に添へる擴張語二個ありて確定語に添へる擴張語中更に又他の擴張語を含めるものを示す。

山のあなたお大なる茂れる森あり。



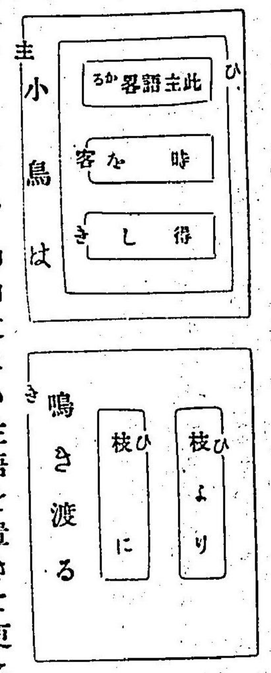
此の文は、森といふ主語とありといふ確定語より成れるものなれば、森を主部に收め、ありを確定部に收む。

大なると茂れるとの共に、森の擴張語なれば其の輪廓を分離して主部中に駢列し、又山のあなたにといへる一句の森のある所を示せる擴張語なれば此の一句全体に一の輪廓を施し以て確定語の部中に收め、然る後山ののあなたの擴張語なるを以て更に輪廓を加へてこれにもひの符號を附せり。

第三例。

此の例は主語に屬する擴張語中と客語と確定語とを含み而して確定語に屬する擴張語の相駢列せるものを示す。

時を得し小鳥は枝より枝に鳴き渡る。

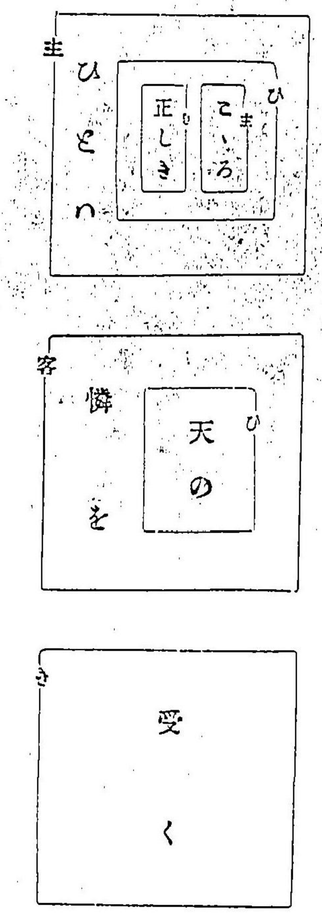


此の文に於て得しといふ言葉の主語の勿論小鳥なるべけれども下に小鳥といふ語あるを以て上には之を略けるなり。抑和文にの主語を置きて更に差支なき場合にても往往之を略くことあるの他國の文と大に其の趣を異にせる所なり。又主語ある文体にても聊の言葉遣ひにて直に主語なき文体となすを得べし、例へば「絹、上州より出づ」と云ふ文を「絹の上州より出だす」と改むる時の同じ文体の様なれども一は主語あり一は主語なきが如し、此れ等の差別は分解上最も注意すべき所なり。

第四例。

此の例は主客確定の三部を備へ且擴張語中に主語と確定語とを含むことあるを示す。

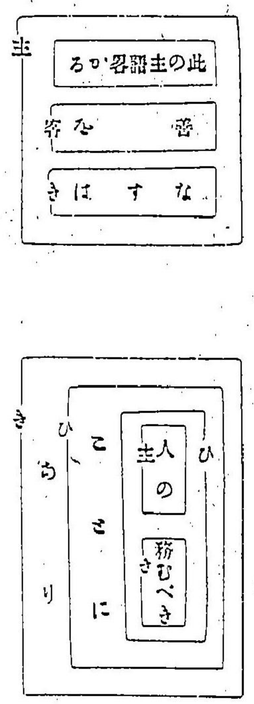
心正しき人は天の憐を受く。



第五例。

此の例ハ客語と確定語とを以て主部を組織し且確定部中の擴張語中にも主語と確定語とを含むものなり、但しナリはニアリの約なれバ先之を其の原形に復して分解すべし。

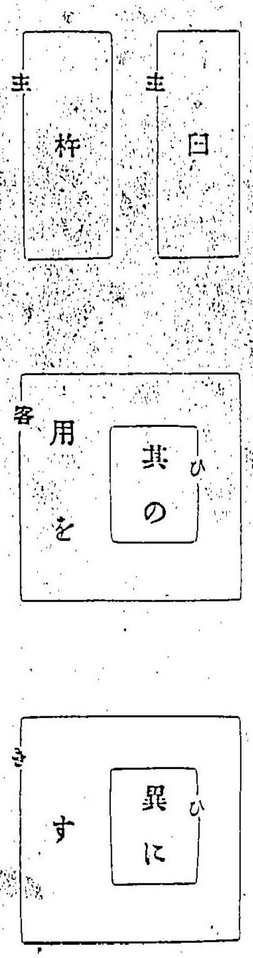
善をなすは人の務むべきことなり。



第六例。

此の例ハ一文中二箇の主語を含むことあるを示す。

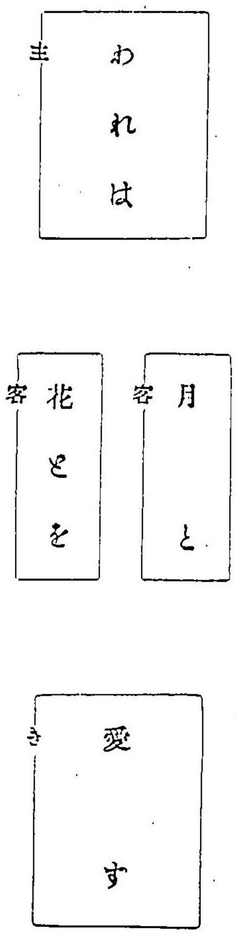
臼杵其の用を異にす。



第七例。

此の例は一文中二箇の客語を含むことあるを示す。

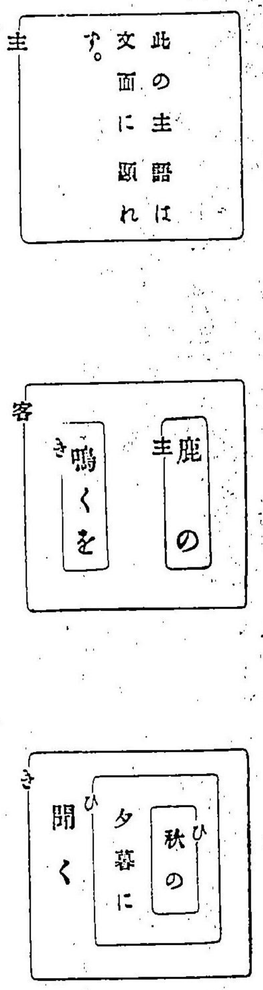
これは月と花とを愛す。



第八例。

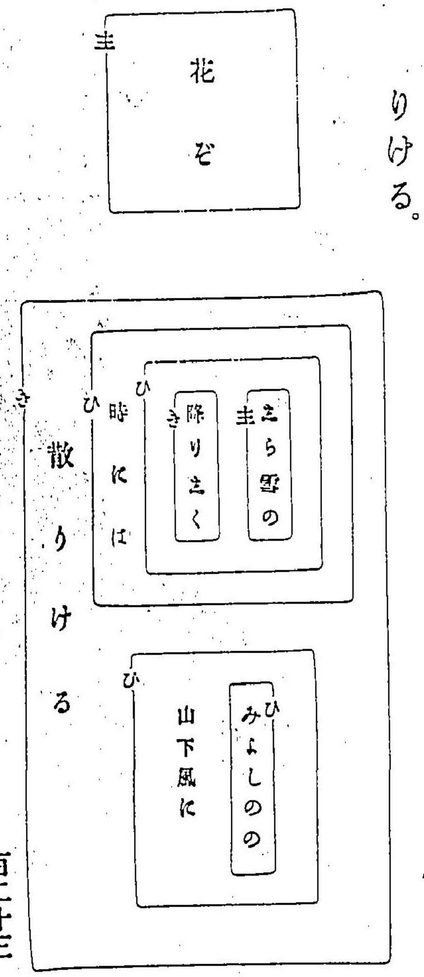
此の例は客語中に主語と確定語とを含み而して全文の主語を畧きたるを示す。

秋の夕暮に鹿の鳴くを聞く。



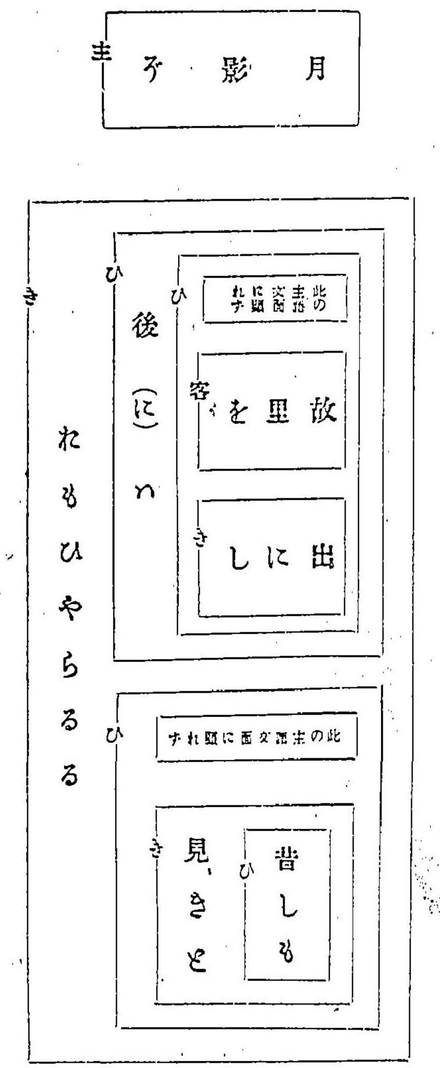
第九例。

たら雪の降りおく時はみよしのの山下風に花ぞ散りける。



第十例。

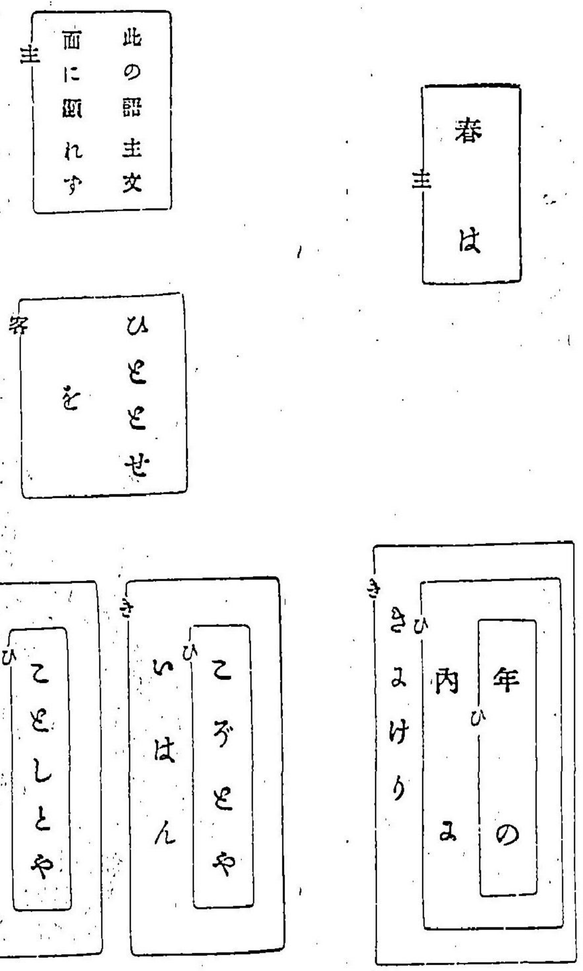
故里を出にし後は月影ぞ昔しも見きと思ひやらる。



第十一例。

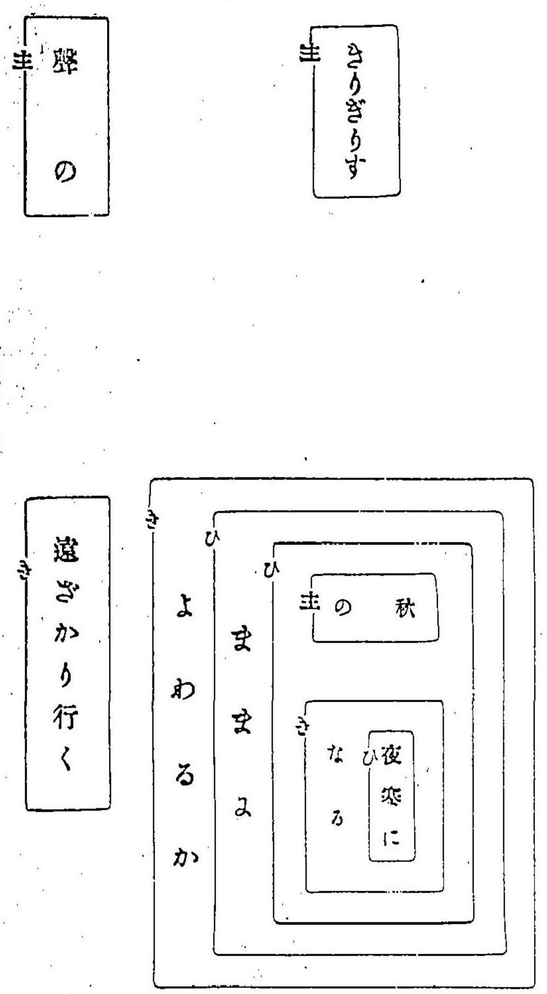
年の内に春はきにけり、ひととせをこぞとやいはん

今年とやいはん。



第十二例。

きりぎりす夜寒よ秋のなるままによわるか聲の遠ざかり行く。



練習第十三。

左の文を分解せよ。

いつかは雪の消ゆる時ある。我がたましひの無き心地す。雨雲のはるる時なし。初雪の庭は心の塵もなし。月はそし葛や茂りかくすらん。夢は江南の村を繞る。やまと歌は人の心を種としてよろづの言葉とぞおれりける。この歌は天地のひらけはじまりける時よりいできにけり。春の朝に花の散るを見る。小野小町はいにしへのそとをりひめの流なり。春の日の光にあたる我なれどゝしらの雪となるぞわびしき。みよしのの山邊よさける櫻花雲ゝとのみぞあやまたれける。このすみたつ春の山邊ゝ遠けれど吹き來る風は花の香ぞする。

第三章。言葉の關係。

言葉の關係とゝ文句を組織する一言一語に就きて其の作用を論ぜる術を云ふ。其の法稍文章の分解に似たれども彼れは一文を主、客、確定の三大部に分解して其の組織を示し、此れは一言一語の作用を說きて其の相關係する脈絡を曉らしむるを以て目的とす。抑言葉の關係を說くにも主、客、確定の三語を設くるは勿論なれども、前に述べたる如く各言各語に就きて論ずるが故に文章の分解にて說けるとは少しく其の趣を異にし主語外の名言は總て之を客語と解剖するなり。故に此の章に於て論ずる客語にゝ主語の作用を受くるものと其の作用を施す目的となるものと單ゝ他の言葉に隨屬するものとあるなり、例へば「風枝を折る」といへば此の枝は風の折る作用を受け「月雲に入る」といへば此の雲は月の入らんとする目的となり「梅の花」といへば此の梅は單ゝ花ゝ隨屬をる言葉なるが如し。

抑言葉の關係を解ゐんには言論中示す所の例格ゝよりて先其の類別をなし然る後に各言各語の作用脈絡を說くべし。左に數例を揭げて其の大略を示さん。

第一例。

梅の花盛に開く。

（梅）モ・ナ・客語。のによりて花に關
（の）カ・ア・梅と花との關係を示す。
（花）モ・ナ・開くの主語。
（盛に）ソ・開くを名狀す。

（開く）　ワ・タ・イ・ゲン・シ・タ・ゴ。　花を確定す。

第二例。

山のあなたに大なる茂れる森あり。

（山）　モ・ナ・　客語。のによりてあなたにかかる。
（の）　カ・ア・　山とあなたとの關係を示す。
（あなた）　ア・ナ・　客語。にによりてありにかかる。
（に）　カ・ア・　あなたとありとの關係を示す。
（大なる）　サ・ヨ・イ・ゲン・タ・ゴ。　森を形容す。
（茂れる）　ワ・ヨ・イ・クワン・シ・タ・ゴ。　森を形容す。
（森）　モ・ナ・　ありの主語。
（あり）　サ・タ・イ・ゲン・ダ・ゴ。　森をたしかむ。

第三例。

時を得し小鳥は枝より枝に鳴き渡る。

（時）　モ・ナ・　客語。をによりて得しにかかる。
（を）　カ・ア・　時と得しとの關係を示す。
（得し）　ワ・ト・タ・ヨ・イ・クワゴ・タ・タ・ゴ。　小鳥を形容す。
（小鳥）　ア・ナ・　鳴き渡るの主語。
（ゝ）　サ・ア・　わかつ意を示す。
（枝）　モ・ナ・　客語。よりによりて鳴き渡るに關る。
（より）　カ・ア・　枝と鳴き渡るとの關係を示す。
（枝）　モ・ナ・　客語。にによりて鳴き渡るに關る。
（に）　カ・ア・　枝と鳴き渡るとの關係を示す。
（鳴き渡る）　ワ・ワ・タ・イ・ゲン・シ・タ・ゴ。　小鳥をたしかむ。

備考。指示の後置言疑訝の後置言並びに感歎言は言葉の關係上にゝ其の用なし、故に唯其の類別を示せゞ足れりとす。

第四例。

これゝ花と月とを愛す。

（われ）　タ・カ・ナ・　愛すの主語。
（ハ）　サ・ア・
（花）　モ・ナ・　客語。なによりて愛すにかかる。
（と）　ツ・　花と月とをつなぐ。
（月）　モ・ナ・　客語。なによりて愛すにかかる。
（と）　ツ・　前のとに同じ。
（を）　カ・ア・　花並に月と愛すとの関係を示す。
（愛す）　ア・タ・イ・ゲン・タ・タ・ゴ・　われを確定す。

第五例。

心正しき人は天の憐みを受く。

（心）　モ・ナ・　正しきの主語。
（正しき）　サ・ヨ・イ・ゲン・タ・ゴ・　心を確定し人を形容す
（人）　モ・ナ・　受くの主語。

（は）　サ・ア・
（天）　モ・ナ・　客語。のによりて憐みにかかる。
（の）　カ・ア・　天と憐みとの関係を示す。
（憐み）　ハ・ナ・　客語。なによりて受くにかかる。
（を）　カ・ア・　憐みと受くとの関係を示す。
（受く）　ア・タ・イ・ゲン・タ・タ・ゴ・　人をたしかむ。

第六例。

われも人なり。

（われ）　タ・カ・ナ・　なりの中に含めるありの主語。
（も）　サ・ア・　あはする意を示す。
（人）　モ・ナ・　なりの中に含めるにによりて其の言葉のありに関る。
（なり）　サ・タ・イ・ゲン・タ・ゴ・　此の中に含めるには人と此の言葉に含めるありとの関係を示し、ありはわれをたしかむ。

第七例。

年の内に春ハきにけり、ひととせをこぞとやいはん
ことしとやいはん。

（年）モナ。客語。のによりて内にかかる。
（の）カア。年と内との関係を示す。
（内）モナ。客語。にによりてきにけりに関る。
（ハ）カア。内ときにけりとの関係を示す。
（春）モナ。きにけりの主語。
（ハ）サア。
（きにけり）ワ。トタ。トタ。タイ。グワコクワン。ジ。タゴ。春をたしかむ。
（ひととせ）アナ。客語。をによりていはんにかかる。
（を）カア。ひとせといはんとの関係を示す。
（こそ）モナ。客語。とによりていはんにかかる。
（と）カア。こぞといはんとの関係を示す。
（や）カア。うたがひの意を示す。
（いはん）ワ。カイ。ゲン。タ。タゴ。主は文面に顯れず。
（ことし）アナ。客語。とによりていはんにかかる。
（と）カア。ことしといはんとの関係を示す。
（や）カア。
（いはん）ワ。カイ。ゲン。タ。タゴ。主ハ文面に顯れず。

以上七例にて普通一般なる言葉の關係ハ略了解せらるべければ此れよりは變例を掲げて其の應用を示すべし。

一、一句若しくは一語を名言と見做す事あり、例へは「善をなす最樂し」を一の名言と見做して後置言トを以て之を受け「我れ將に行ゝんとす」と云ふ時は「行かん」を名言と見做して後置言トを

以て之を受くるが如し。其の解剖法を左に示さん。

善をなす最樂しと答へたり。

（善）　モノ。　客語。をによりてなすにかかる。
（を）　カプ。　善となすとの關係を示す。
（なす）　ヲ・ヨイ・ゲン。タ・ゴ。
（最）　ソ。　樂しを名狀す。　主ハ器かる。樂しの主語
（樂し）　サ・タイ・ゲン・タ・ゴ。　なすを確定す。
（と）　カプ。「善をなす最も樂し」の一句と答へたりとの關係を示す。
（答へたり）　ヲ・トタ・タイ・クワン・シ・タ・コ。　此の主語ハ文面にあらはれず。

我れ將に行かんとす。

（我れ）　タカナ。　すの主語。
（將に）　ソ。　行かんを名狀す。
（行かん）　ヲ・カイ・ゲン・シ・タ・ゴ。　主ハ器かる。とによりてすにかかる。
（と）　カプ。　將に行かんとすとの關係を示す。
（す）　ヲ・タイ・ゲン・シ・タ・ゴ。　我れ、をたゝかむ。

一、用言の形容格は名言の作用をなす事あり、今前例に就きて說かんに「善をなす」と云ふなすは形容格の言葉なれば なす事と名言を其の下に加へて解剖するも素より差支はなき筈なれども、それは面倒なればなすといふ言葉の中になす事と云ふ意を含めたるものと見做してなすは樂しの主語、樂しはなすを確定すと解剖するが如し。

又主客の別はあれども「人の歸るを送る」「花の散るを惜む」などいふ文を解剖するにも歸る散るを直に客語と見做して解剖するこそ便利なるべけれ。

一、用言のシと撥ぬる假定格は形容格の作用をなす事あり、

例へば「經にけん秋を知る人ぞなき」といふ文の經にけんは假定の意を含めて秋を形容したるものなれば宜しく形容格と見做して解剖すべきが如し。されば又名言の作用をなすこともあるなり、例へば「斯くあらんはいと願はしきことなり」といふが如し、是れ亦形容格の例に做ひて解剖をべし。今其の法を左に示さん。

經にけん秋を知る人ぞなき。

(經にけん) ヲ。トタ。トタ。カイ。クヲコクヲン。タ。タ。ゴ。主ハ器かる。秋を形容す。
(秋) モナ。客語。なにによりて知るにかかる。
(を) カア。秋と知るとの關係を示す。
(知る) ヲ。ヨイ。ゲン。タ。タ。ゴ。主ハ器かる。人を形容す。
(人) モナ。なきの主語。
(ぞ) サア。指示の作用をなす。
(なき) サ。タイ。ゲン。タ。ゴ。人をたしかむ。

備考。起結三轉法によりて其の形を變せし言葉は總て直說格と見做して解剖すべし。

斯くあらんはいと願はしきことなり。

(斯く) ソ。あらんを名狀す。
(あらん) サ。カイ。ゲン。タ。ゴ。主ハ器かる。なりの中に含めるありの主語。
(は) サア。
(いと) ソ。願はしきを名狀す。
(願はしき) サ。ヨイ。ゲン。タゴ。主ハ器かる。ことを形容す。
(こと) モナ。客語。なりの中に含めるにによりて其のありにかかる。
(なり) サ。タイ。ゲン。タ。ゴ。此の中に含めるにはことと此の言葉に含めるありとの關係を示しありはあらんを確定す。

一、言葉を略したるは之を補ひて解剖すべし、例へば「春の野に若菜つまんとこしものを散りかふ花に道はまよひぬ」といふ歌は「若菜を摘まん」「道をば迷ひぬ」と補ひ「月明に星稀なり」は「明にあり」と補ひ「初雪の庭は心の塵もなし」は「庭よは塵もなし」と補ふが如し。

一、不定格の確定語を有する文を駢列し其の最末の一句を形容格にて結び以て其の下に在る名言を形容したる文を分解するには毎文を其の名言の擴張語と分解するとあり、故に言葉の關係を說くにも其の確定語を形容格と見做して解剖せざるを得ず。例へば「才たけ學び深く人品鄙しからざる人あり」といふ文の如きは「才のたけた る、學びの深き、人品の鄙しからぬ人」といふ意にて解剖するが如し。其の解剖法を左に示さん。

才たけ學び深く人品鄙しからざる人あり。

(才) モ・ナ。 たけの主語。
(たけ) ワ・ナ・イ・ウ・タ・ゴ。 才をたしかめ人を形容す。
(學び) ハ・ナ。 深くの主語。
(深く) サ・ナ・イ・タ・ゴ。 學びをさしかめ人を形容す。
(人品) モ・ナ。 鄙しからざるの主語。
(鄙しからざる) サ・ウ・タ・ヨ・イ・ゲン・タ・ゴ。 人品をたしかめ人を形容す。
(人) モ・ナ。 ありの主語。
(あり) サ・タ・イ・ゲン・タ・ゴ。 人をたしかめ。

一、字音を約め又は延して唱ふる類は之を其の正格に改めて解剖すべし。例へば行かで行かずして、てふはといふ、ならなくいならぬ、いへらくはいへる、けらくはけるら

し、行かまし、は行らんかしと改めて、解剖するが如し。

一、ナ、ソの二語を挾みて禁止の下知法に用ふる事あり、例へは「なゆきそ」と云ふが如し。此れ一種の變格なれば、宜しく「ゆかざれ」の例に倣ひナ、ソの二語を合せて否不の助用言と見做して解剖すべし。

右の外變例を枚擧せば猶多かるべけれど以上說き示せる文例に熟達せば他ゝ自から了解せらるべし。

第四章。文章の正誤。

夫れ文法と云ふは其の國國に行ゝるる言語自然の狀態によりて定りたるものなれば、言語の法一變それば、文法も亦隨て變化せざるを得ず、是れ古代にゝ古代の文法あり近世には近世の文法ある所以なり。されば言語は本あり文法は末なり學者宜しく現時の語法によりて文を屬し歌を詠ずべし。文典何の用をかなさんと唱ふる人なきにしもあらずといへども斯くては人人の用ふる言葉はおのゞ自儘に流れ隨て文學の隆替ゐも關することあるべし。されば先人の既に慣用せし例格によりて其の紛亂せしものを訂し成るべく一致せしめんこそ學者の最も務むべき所なるべけれ。是れここに初學の最も誤り易き條目を列記して其の大要を示さんとする所以なり。

第一項。起結三轉法と誤るべからず。

起結三轉法の事は前既に說きたるが此の法古よりいと嚴なれども今の初學の人ゝこれを誤るもの多し。例へば「何ゝ何せし」「何は何しうる」抔と結ぶもの多し甚しき誤りと

謂ふべし。

第二項。 用言の活きを誤るべからず。

作用言第二種の言葉はウル、ウレと唱ふるものなれど俗言にはエル、エレといひ、第三種もウル、ウレなれど俗言にはイル、イレといふによりて擧ぐるを擧げ合はするを合はせる起くるを起きる滅ぶるを滅びる抔と用ふるものあり。又言葉はそれぞれ其の行の定りあるにも拘らず他の行と混じて用ふるもあり。例へば用ヒといひ又用ウといひ、代へテといひ又代ユと云ふがごとし。これらは最も意を留むべきことなり。

第三項。 形容格にあらざる言葉にて名言を形容すべからず。

名言の上にありて之を形容するには必形容格を用ふべき筈なるに「唱ふ人あり」「言ひ傳ふ所なり」抔と直說格の形を用ふるものあり。

第四項。 エリ、エルの形に變ぜざる言葉を此の形に變すべからず。

エリ、エルの形に變ぜざる言葉は作用言第一種と第六種と第八種とに限るものなるに他種の言葉をも此の形にいひなすものあり、例へば擧げり、痩せり、兼ねり、埋めり抔といふが如し、皆誤りなり。

第五項。 自動の作用言と他動の作用言とを誤るべからず。

作用の自他によりて活用の變ぜる作用言多きことは上に

說きたるが初學の人往往此の差別を辨へざるがごとし。家を立つ人、家の燒くを見る、軒を傳ふる雨、云ひ傳ふ所など皆誤りなり。

第六項。 セシ、シシの差別を誤るべからず。

時の助用言キの形容格にて作用言第八種の言葉を受くるには必何何せし、と受け又作用言第一種の言葉を受くるには何何し、しと受くるが常法なり、例へば論せし、しとはいへど論じし、しといへど推せし、しとはいはざるが如し。さるを此の格を誤り某へ斯く申せし、抔と用ふるもの往往あり、注意すべき事なり。

第七項。 セテ、シテの差別を誤るべからず。

作用言第二種佐行の言葉は何せて、といふべき筈なるに何して、と誤ることあり、例へばまろせてをまかして、といふが如し。又之に反して作用言第一種佐行の言葉は何して、といふべきを何せて、と誤ることあり、例へばうつろはして、をうつろはせて、といふが如し。

第八項。 シサセテ、セサセテの差別を誤るべからず。

作用言第八種の言葉を語勢の助用言さする、にて受くるには何せさせて、といふが常法なるに論じさせて感じさせて抔と用ふるものあり。

第九項。 サン、センの差別を誤るべからず。

假定格にて何さん、と云ふは作用言第一種佐行の言葉に限る筈なるに第二種又は第八種の言葉にも誤りて此の形を

用ふるものあり、例へばあはせんをあはさん敬せんを敬さんと云ふが如し。又之を反して何せんといふは第二種と第八種に限る筈なるに第一種にも此の形を用ふるものあり、例へばかよはさんと云ふべきをかよいせんといふが如し。近來此の格を誤るもの多し注意すべきことなり。

第十項。サルル、セラルルの差別を誤るべからず。

何さるるといふは作用言第一種佐行の言葉を語勢の助用言らるるして受くるときの形なるも、作用言第八種と第二種との言葉をも此の形にいひなすもの多し、例へば敬せら、る合いせらるといふべきを敬さる合いさるといふが如し。近來の普通文には此格のを誤るもの甚多し尤注意すべきことあり。

第十一項。サスル、セサスルの差別を誤るべからず。

何さするといふは語勢の助用言さするにて作用言第一種佐行の言葉を受くるときの形なるは前項らるるに同じ。然るを作用言第八種並びに第二種の言葉をも同じ形にいひなせるものあり、例へば合はせさする解せさすると云ふべきを合はさする解さすると云ふが如し。

第十二項。形狀言第二種の直說格にシ文字を添ふべからず。

形狀言第二種のあし、樂し、哀し等の言葉をあしし、樂しし、哀しし抔といふは俗言にして雅言にあらず。

第十三項。 關係の後置言トにて受くる用言の格を誤るべからず。

此の受け方はすべて用言の直說格より受くるゲ定りなる。「落つると聞く」「受くると云ふ」「あると思ふ」抔と誤り用ふるもの多し戒むべきことなり。 抑ヅ、ノ、ヤ、コソ等の係辭あるときは其の定例の結びより受くるが常法なれども前後の摸樣によりてハ此の係りはありながら尋常の直說格より受け又ハ此の係りはなけれども態と形容格より受くる例なきにしもあらず、此は別に深き仔細のあることなれば漫りに倣ふべからず。 但し行かんと欲す、見んと思ふ抔と假定格より受け、又は見よと云ふ、行けと聞く抔と命令格より受くるは常の事なり。

第十四項。 疑訝ハ後置言ヤにて受くる用言ハ格を誤るべからず。

後置言ヤは辭句の半ばに置くと其の結末に置くとの二樣ありて其の受け方も亦それぞれの定まりあることなり半ばに置くヤは必形容格より受け、結末に置くヤハ直說格より受くるを常法とす、例へばあるや戀しき、なきやかなしき抔ハ半ばに在るヤにしてありやなしや、ありきや、なかりきや、見ずや、聞めや抔は結末に在る例なり。 抑半ばヨ置きたる方を誤るものはいと少けれども結末に置きたる方は誤り易く動もすればあるや、なきや、ありしや、聞めるや、抔と用ふるもの多し、心付くべきことなり、但し假定格は行かんや、行きけんや抔と用ふること常なり。

備考。疑訝の後置言カは形容格より受くるが常法にして此の言葉は形容格より受けずては言葉の調べ諧はざれば誤ることは少し。

第十五項。接續言トモにて受くる用言は格を誤るべからず。

此の言葉は用言の直說格より受くるが常法なり。さるを誤りて形容格より受くるもの少からず。例へば「悔ゆるとも及ばず」「身は斃るるとも已まず」抔と云ふが如し。

第十六項。治定の助用言にて受くる用言の格を誤るべからず。

治定の助用言にて作用言を受くるときは其の直說格より受くるが常法なれば「落つべし」「論ぎべし」といふべき筈なるに「落つるべし」「論ぎるべし」と其の形容格より受くるもの往往あり、戒むべきことなり。

練習第二十四。

次ぎの文に就き其の正しからざる所を訂正せよ。

彼れは年老いたれども富み榮える人なり。曲者を手捕りになせしは勇猛とこそいふべし。此の城は攻むるとも落つるべくもあらず。いはで心に思ひこそする。かくては國の滅びる足を擧げて待つべし。手枕のすきまの風も寒かりし。故里の大和なでしこ色やかはれり。斯くては實學を妨ぐ事もあるべし。この牛はいたく暑ければこそかくは喘ぐなり。右は古より言ひ傳ふ事實なり。我れぞよるべもなき心地せり。かかる事とはつゆ思はざりし。別れ

路の雪のまにまに深くなるらめ。花すすぎ君がかたにぞなびくめり。今は昔桃太郎となん云ふ人ありけり。夜や暗し道やまどへる。問ふ人も無き宿に荻吹く風も騒がしし。此の卷は神明の事をあらはせしものなり。音羽の山の今朝はかすめり。舟を浮びて月を觀し。花よりも人こそあだになりにけり。高き木にのぼらして其の梢を切らしにいと危くぞ見えにけり。乘りける船海底に沈みければ人ども皆歸らずなりにけると云ひ傳へけり。前に擧げる例証は余が多年實驗し所なり。但し再撰することを得る。折りつれば袖こそにほふ梅花あるとやここに鶯の鳴く。延喜の治と申せしは何れの御世なるや。心にゝ悪しとゝ思ひきが得改めざりしは殘念なりし。神代のことも思ひ出づらめ。みなむすびと云ふは絲を結びかさねる狀みなといふ具に似たるを以てなり。斯く申し述べければ深く感じさせられぬと云ふ。經文はすべて梵語を翻譯されしものなり。才あるとて賴むべからず孔子も時にあはざりしにはあらざるや。露おきそひて秋ぞくれぬる。彼れは智仁勇の三德を兼ねり。よしや一命をすつるとも いかで心のかはるべし。世に悪人の盡くるべきやはおもはず。博士才人など召さして文作らし給ふ。秋風にさそはれわたるかりがねは雲井はるかに今日ぞきこゆれ。昨日開きし演說ゝ中止されたりと云ふ。今ゝはや塵の世を逃れる心地せり。車を走らして訪ひ參らす事もあらん。人あれずこそ思ひをめしに。君若しおろかなるとも賢臣

之をたすけなば其の國みだる事あるべからず。宛もみだれる絲を解くが如し。いかがしさせ給はんやとなげき聲にて申し合へり。弓矢追取り引返せしに敵いはや逃げ失せにけり。府縣制い多分來月中に發布さるべしと云ふ。徒らに物を弄べば志を失ふの戒めも聞めるかし。

附錄

言論及び文論中に用ひたる術語。

名	訓（符號）	英名
名言	なことば（ナ。）	Noun.
体言	すわりことば	Substantive.
純名言	もはらなことば（モ・ナ。）	Noun proper.
用名言	はたらきなことば（ハ・ナ。）	Verbal noun.
合名言	あはせなことば（ア・ナ。）	Compounds.
代名言	かはりなことば（カ・ナ。）	Pronoun.
普通代名言	ただのかはりなことば（タ・カ・ナ。）	Pronoun proper.
疑問代名言	うたがひのかはりなことば（ウ・カ・ナ。）	Interrogative pronoun.
用言	はたらきことば（ハ。）	Verb.
作用言	ヨざのはたらきことば即ヨざなことば（ヲ。）	Pure verb.

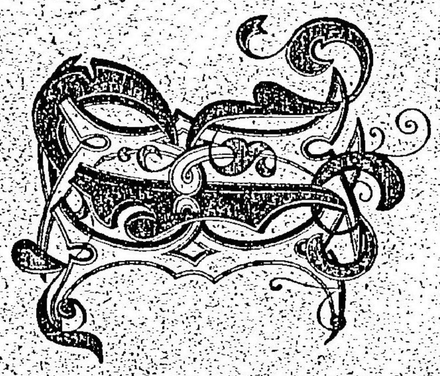
形容詞	[illegible]	Attributive verb
助動詞	[illegible]	Auxiliary verb
直説法	[illegible]	Indicative mood.
願望法	[illegible]	Desiderative mood.
形容法又連体法	[illegible]	Participial mood.
假定法	[illegible]	Conditional mood.
假定法	[illegible]	Hypothetical mood.
命令法	[illegible]	Imperative mood.
連用法	[illegible]	Conjunctive mood.
不定法	[illegible]	Infinitive mood.
時	[illegible]	Tense.
現在	[illegible]	Present.
過去	[illegible]	Past.
完了	[illegible]	Perfect.
過去完了	[illegible]	Pluperfect.
自動	[illegible]	Intransitive.
他動	[illegible]	Transitive.
語勢	[illegible]	Voice.
常態	[illegible]	Positive voice.
受動態	[illegible]	Passive voice.
令動態	[illegible]	Causative voice.
被令動態	[illegible]	
令受動態	[illegible]	
否定ノ助用言	[illegible]	Negative Auxiliary.
治定ノ助用言	[illegible]	Potential Auxiliary.
崇敬ノ助用言	[illegible]	Honorific Auxiliary.
副言	[illegible]	Adverb.
後置言	[illegible]	Postposition.

關係ノ後置詞	かかりのあとことば(ガ・ヲ・ニ)	Connective postposition.
指定ノ後置詞	さしなめしのあとことば(ナ・デ)	Implicatical postposition.
疑問ノ後置詞	うたがひのあとことば(カ・ヤ)	Interrogative postposition.
接續詞	つゞけことば(ツ)	Conjunction.
感歎詞	なげきことば(ナゲ)	Interjection.
主語	むねことば(主)	Subject.
確定語	きめことば(ル)	Predicate.
客語	めあてことば(客)	Object.
擴張語	ひろめことば(ス)	Modifier.

明治廿三年十二月廿四日印刷（日本文法教科書）
同　年十二月廿六日出版　定價金三拾五錢
同　廿四年五　月十五日再版

著作者　手嶋春治　京都市下京區七條通夷之町廿八番戸
發行者　原亮三　東京市日本橋區本町三丁目十七番地
同
印刷者　日置九郎
同
發兌　金港堂本店　大坂市東區南本町四丁目二百廿一番地
大賣捌所　金港堂支店

版權所有



815
Te212n
(2)

078598-000-4

815-Te212n(2)

日本文法教科書

手島　春治／著

M24
DAC-2320

三宅米吉校閲
手島春治著

日本文法教科書

東京
金港堂